インフェクションIF

フリードg

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＰＣの片隅に埋もれてた昔書いてた小説発見。

勢いでまた、投稿してしまった。……が、悔いは無し。

突然、週刊少年マガジンから、マガジンポケット？　に移動となったインフェクションの二次小説です。

目次

0話 1
1話 8
2話 14
3話 25
4話 33
5話 序章 48
6話 58
7話 69
8話 81
9話 93
10話 102
11話 109

0話

その日――人生は一変した。
背後から押し寄せてくるのは、絶望そのものだった。
それは　まるで、巨大な竜が大きな口を開けて、追いかけてくる様な、そんな感覚。
その竜は、建物も車も……人も、あらゆるものを飲み込み、そして　全てを食らい尽した後は、そのまま全てを連れ去っていった。竜が暴れた後には何も残らない。……大切なものも全て飲み込み、残ったのは残骸。町は瞬く間に廃墟になってしまった。
『……』
自分は、安全地帯に逃げ延びる事が出来た。
竜の牙の及ばない、高地に逃げる事が出来た。
そう――自分だけだった。
親も、友達も――、そして……。

『おにいちゃんっ――――……!!』

□　□　□　□

太陽が、自身の身体を照らしてくれているのがよくわかる。
暖かい光が、身体を包み込んで、そして　優しく起こしてくれた。……救えなかった悪夢から。悪夢だった故に、起こされた事が嬉しかったのか、或いは悲しかったのか、……自分自身への怒りが収まらなかったのかが判らない。
だけど、この光は自分には眩し過ぎる。……何処か、そう思えてしまっていた。
「……」
そして　ゆっくりと体を起こし、軽く頭を振る。

一体どれくらい、眠っていただろうか……、腕を持ち上げて、着けている腕時計で現在時刻を確認してみる。

「……13時、20分、か。……小1時間、程度」

目を擦って現在時刻を確認すると、ゆっくりと腰を上げたその時。

『ったく、こんなとこで昼寝かよ。随分と余裕なんだな？　ゴールが近いとは言ってもよ？』

突然、背後から声が聞こえてきた。

足音を限りなく殺し、気配を出来る限り絶って近づいてきてた様だ。完全に背後を取られたのだが、彼に慌てた様子は何処にもなかった。

「別に良いだろ。ボスは寝ちゃ駄目だって言ってないし。それに、そもそもそんな禁止事項、この訓練の中に無かったし」

振り返る様子もなく、ただ淡々とそう返していた。

会話から察するにどうやら、何かの訓練の最中だった様だ。

「はぁ。確かにボスも先輩も、別に言っちゃいなかったが。……そもそもお前がここにいるのは、マジで異例中の異例なんだぞ？　だから、そんな奴が入ってるんだから、突然に例外っつーのが、今まさにこの瞬間から生まれてもおかしくないだろ」

「……それについては、別に否定しないし、するつもりもない。それに、そんなもんが出

来たら、出来たその時に考えればいいだけだろ？」
「……ったく、敬語使えってのクソガキ」
言いえて妙な回答だが、ため口が気に入らない様子だった。
因みに、少し詳しく説明すると彼らは今は、山岳地帯にて絶賛訓練中である。
指定された目的地までに、時間制限付きで到着するというもの。
この訓練で、サバイバル術を向上させ、且つ生存力をも向上させるのが目的のものだ。
……毎年恒例で行われている事であり、怪我人が続出しているのも事実であり、命を落としかけた者もいると聞くハードな訓練の1つなのだ。
そんな訓練で、呑気に眠っている者など、前代未聞だと言っていい。そして、その年齢も……。
「減らず口は一人前の癖して、まだ成人にもなってないガキだってのに、やっぱお前はとんでもないぜ」
「……アンタに言われたくない。歳だって、そう大差ないだろ。オレと。5～6歳くらいか？」
「オレは、オレと並ぶ男が歳下にいる事に驚いてるんだよ。……判れよアホ」
ははっ、と歯を見せながら笑っていた。
それを聞いて、ため息を吐く。

「……でもな、オレは　殆ど勝てた事無いんだが？　組手の訓練とかでも」
「馬鹿言え。歳下にそう簡単に負けるなんざ、オレが許せねぇよ。大体殆どって自体がアレなんだよ。オレに言わせてもらえば」
　話し方、そして雰囲気を察するに、どうやら、互いがそれぞれ認め合った関係の様だ。上下関係など無いに等しい。ただ、実力を示し続けている為、お互いが認めているのだろう。
　そんな時。
『コラァァ！　何サボってやがる!!』
「んげ、見つかった！」
「……予定、狂ったな。思ったより早かった。もうちょっと寝れる予定だったんだけど」
　首をくきくき、と鳴らし　ゆっくりと立ち上がったその時だ。
「行くぞ、オラ！」
「ぐえっ」
　襟首を思いっきり引っ張られ、強引に連れ去られてしまう。
「大隊長は、ボス程甘くねぇ。それくれぇ判ってんだろ？　龍！　ボスの指示とか禁止事項とか、関係なしで　お仕置きモードに入っちまうぞ」
「む、ぐぐぐ、、く、くるし、くるし……！」

「ああ??　何だって??」
　掴む手も、動くスピードも決して落とさずに、そのまま進み続ける男を、強引に払うと、一足飛び脚で男の前に出た。
「くるしい、っつたんだよ!・　大体、大隊長が鬼モードになってるのくらい、もうオレでも判ってるわ」
「ほっほー、センスや身体能力は兎も角、お頭は弱い、物覚えは悪い、と判断したんだがな?・」
「アホ言え。一緒にするな。それにさっき言っただろ。例外が生まれたんだから、今考えた」
「ほー。なら　どーするって言うんだ?・」
　走りながら、軽く笑う。そして　その速度が一段階増した。
　そして、1歩、いや3歩前に出た。
「此処で、《神城　有》っつー、消防隊始まって以来の規格外をぶっちぎる。……それでお咎めなしにする」
「……面白れぇ!・　乗ってやんよ!・　龍!・」
　その後はデッドヒートである。
　障害物の多い山道を、まるで普通の道の様に走り、時には跳躍し　突き進んでいく。

……ゴールに向かって。

「……見えなくなったな」
「相変わらず、むちゃくちゃな奴らだ。……同類項ってヤツだありゃ」
「淀川。……お前にはどう見える？」
「どうもこうも……、2人ともに言える事ですが、あんなに活き活きしてる姿はやっぱり神城と龍の2人が揃った時だけですよ。大隊長」

関係は共に訓練をしている仲間、なのだがそれ以上の何か深い感情がこもった瞳で、もう姿が見えなくなった2人を見守っているのだった。

1話

夜が去り　太陽が今日も顔を出して辺り一面を暖かく照らしているいつもと変わらない日常。今日も部隊では特別な収集や事故等による要請が無い時には通常通りの勤務。

朝に夜勤勤務者からの申し送りを終えた後、車両を含む各種備品のチェックを行う。その後は連絡事項の整理、書類等の確認を終えた後に出動に備えて待機する。（この間に、身体をほぐし体力強化に努める為に体力錬成を行う）

その他に分刻みで色々と行う事は山積みだから　説明を割愛するが　基本的に一般人と比べて非常に大変だという事は言っておこう。

何より此処仙台市消防平岡出張所は他と比べても抜きんでている。

何故なら、統括するトップが色んな意味で変人だからだ。

普通では　勤める事が出来ない年齢の者も素質、資質、素養があるからと簡単に受け入れ　その力を存分に発揮させていたりして、人を見る眼は確かに凄い物があると言え

るのだが、訓練の内容と量が一段と激しい事でも有名だった。
明らかに業務外であろうと思えるが、もしも日本に敵国が攻めてきた時の対処法を事前に備えさせていたり、果ては　なんと　宇宙人が攻めてきた時の対処法までもマニュアル化させて　それに備えさせていたりしていた。
はっきり言って『馬鹿じゃない？』と言えるのだが、基本的に全く表情を変えずに指示を出してくるし、冗談を言った事が無い為　上の指示に従うしかなく、結果として軍隊顔負けの体力を保持した消防隊員が集ったのだ。
その中できらりと輝く原石がいた。まだまだ　粗削りだが磨けば磨くほど輝きを増し、誰よりも光を放つであろう人材が。
その者は消防平岡出張所始まって以来最年少の隊員。
今日も任務の為に、まだ成人にもなっていない身で働き続ける少年は……大欠伸をしていた。
「……ねぇ、テツ先輩。何でオレ　こんなトコにいんの？」
大欠伸をした後に心底うんざりしている様な表情で聞く。その姿はやっぱり幼さが残るのだが、可愛げは全くない　と感じるのは所内の先輩共通の認識だった。
「判ってるだろ？　龍。黙って従え。これも任務だ」
「判ってるつもりだよ？　でもさ、どう考えても絶対場違いだと思うんだよオレ。こん

な騒がしい場所」

くいっ、と首を動かして向けた視線の先には。

『わぁー　しょーぼーしさんだーー！』

『うわーーすげーーー、でっけー　しょーぼーしゃ！』

『あそこから、みずがばしゃーーーっ　ってでるんだよーー。ぼく、みたことあるもんっ！』

『わたしもみた！　それに　おけがしちゃった　おおきなおとこのひとをだっこしてたすけてくれたとこ、みたよ！　すっごくかっこよかったよー！』

きゃっきゃと　笑顔と活気で溢れる子供達が無数にいた。

無数に並ぶ子供達。そして　消火器などを含む備品の色んなセット。

場所は　一言で言えば小学校、そして運動場である。龍たちがいる場所はその直ぐ傍の校舎の控室にさせてもらっている一室である。

今日は現役消防士による火災予防と上級生を対象としたちょっとした消火訓練。消

火剤の代わりに、水を詰め込み　火を付けてそれを消す訓練の講演を行っていた。
　避難する時は煙を吸わない様に～などの説明もあり、消防士の防火服を着ての講習だから、更に目を輝かせている子供達が沢山いて非常に騒がしい……もとい賑やかだ。
「龍もついこの間まではあの子らに混ざってたんだ。懐かしいだろ？」
「……ぁぁ、否定はしないけど。でも　もうずいぶん昔に感じる」
「ボスの計らいだ。お前が持ってるのは年相応の力じゃない。どうなってんのかは正直判らんが、その未成熟な身体ン中にとてつもない力を持ってて、有り余してる状態だ。んなモンをずっと飼い慣らし続けると　精神も疲れちまうだろ？　こういう場所で子供達を相手に心身ともにリフレッシュをだな」
「余計に精神とやらが疲れる。精神やられたら身体にも疲れがどんどん溜まる。だから眠い。つまり寝る」
　テツ先輩、と呼ばれた消防士の熱弁をサラリとスルーした後に、もう一度大欠伸をして眠りに入ろうとする彼の両肩をがしっ！　と掴むテツ先輩。
「に・ん・む　だ！　従え!!　ったく、そろそろ敬語が出来てきたか？　と思ったオレがバカだった。ちったー先輩を敬え！　神城以上だ。ある意味お前は！」
「……くぁぁ～、むにゃ」
「訊けぇぇぇ！」

涙が溜まった目元を拭ってゆっくりとした動きでテツ先輩の方を向く龍。
「それ前にも言われたけど、それ　ボスも大隊長も不問にしてるよ？　先輩方もまぁ最初の頃はアレだったけど今は大丈夫みたいだし、ほら　神城とかもさ。んー……でもにんむ、任務かぁ」
暫く考え込んだ後に、両頬を軽く両手で挟む様に叩くと。
「ガンバリマス。ヨロシクオ願イシマス」
「棒読みで言われると非常にイラっ　とくるがまぁ良い。さっさと来い。龍が実演役だ」
返事から見るに、明らかにやる気が皆無な気がする龍だったが、それでも任務と名の付くものであれば　しっかりと務めている（当然だと思うけど）。
お目付役であるテツ先輩もそこまでは心配はしていないのだった。
「あのー、そろそろ準備よろしいでしょうか？」
どうやら時間が回ってきたのだろう。小学校の先生らしい女性が控室へと入ってきた。
1人の生徒を連れて――――。

「初めまして。私は6年3組の天宮香理です。6年生代表として挨拶に来ました。宜しくお願いします」

大きなくりっとした瞳をいっぱいに開かせて　弾けんばかりの笑顔を向けて　頭を下げる少女。

この出会いが……始まりでもあったのだった。

2話

その少女弾けんばかりの笑顔が目に焼き付き離れない。
その笑顔に目を奪われてしまったのは一体何故だろうか。

――少女に一目惚れ？

いや、龍自身もそれは違うとはっきり言えていた。
龍は　まだまだ歳は成人にもなってない云わば高校生と同じ年齢。龍がこうなる前は思春期と言うものは当然ながらあった。いろいろな意味を持つ《好き》と言う感情も体験しているから、恋慕の感情を持てばどう言う風になるのか覚えているつもりだった。
だから、違うと否定出来る。相手は小学生だから、歳の差も要因の1つだと言えるだ

ろう。
そして　だからこそ判らない事があった。
何故あの少女から目を離す事が出来なかったのだろうか。と言う事だ。
自分の心が……判らなかった。
「おーい、龍」
「……」
「龍！　訊いてんのか？　っておい無視すんなコラ。龍！」
「……」
話を全く耳に入れていないクソ生意気な後輩の背後に回り込むのは　先輩の神城。
すっとしゃがみ込み、二本指を構えて思いっきりケツに向かって発射。
ぶすんっ！
「んがっっ!!」
と言う鈍い音を感じた刹那に来る強烈な衝撃を受けてしまい、流石に龍はそれをもスルーする事は出来なかった様で　思わず身体を仰け反らせつつも振り返った。
「い……ってぇ！　何しやがるコラぁ！　神城!!」
「後輩の分際で先輩様をいつまでも無視してんじゃねぇよ。アホ」
へらへらと笑う神城を見て　思わず毒気が抜かれてしまった龍は、怒って言い返す前

に　突き抜けた衝撃をどうにか対処した。その後、またため息を1つはいた。
「……それでなんだよ一体。訓練スケジュールはもう終えただろ？　緊急要請とかでもない限り今は自由行動時間、待機の筈だと記憶してるが？」
「ああ、確かに終わったな。他の先輩方はまだやってるっつーのに相変わらずガキとは思えねぇスピードと体力でよ」
「って、似た様なの毎度毎度言ってくれるが、人の事ぶつぶつと言える立場かよ。フィジモン神城先輩」
「やっと先輩っつったか。極秘事項をペラペラしゃべる所は頂けんが。テツ先輩がいたら説教もんだぞ」
　龍の事を何だかんだと言ってくれる神城だが、龍自身も神城の事を言いたい。
　その身体能力が異常だと言っていいという事だ。平岡出張所始まって以来の超人だとか、天才だと言われているからだ。色々と訓練をし始める時に　その相手として付けられた事が多々あったから、誰よりも神城と言う男の実力を龍は知っていた。
　それは、神城自身にとっても然りであるが。
「どーでもいい。それより　早く話せよ。なんなんだ？　1人じゃ退屈すぎまーす。かまってくださーい。なんて言わねぇだろ？　先輩様が後輩なんぞに」
　意趣返しの様に言い返す龍だったが、次の言葉で黙ってしまう事になる。

「とりあえず、元気がねぇな、と思っただけだ。講演に行ってから様子が変だったぞ？　あの小学校で何かあったのかね？」
「っ……」
神城の言葉を訊いてしまったからだ。
別に、意識してやっていた訳じゃない。出来る限りいつも通りの平常心を保つ事が出来ていた筈だった。
そう――筈、だった。
だが、神城の前ではそうはいかないのだと言う事を強く実感する。
「あほか。もうどんだけの付き合いになってると思ってんだ？　お前」
「……そんなに長く無いだろ。オレとの付き合いなんか」
「それこそアホか。時間なんざ関係ねぇよ。どれだけ濃密な時間を一緒にいたと思ってんだ？　ってんだ。お前の様子がいつもと違う事なんざ、誰だって気付くだろ。ここの面子なら。テツ先輩なんか、『槍でも降るんじゃないか？』って言ってたぞ」
「……なんの冗談を言ってんだ。あの人」
深く息を吐き、軽く落ち着く様子を見せる龍。
それを見た神城は、にやっ　と笑みを見せると　龍の肩に腕を回した。
「言ってみ？　言ってみ？　つか、女　だろ？　恋煩いかぁ　遅い青春満喫してんだろ

？」
「アホ言え！　お前は飲み屋で絡んでくる酔っ払いか！　離せ！」
　ぱしっ、と腕を払いのける龍。そして神城は笑い続ける。
「その飲み屋の酔っ払いを潰した酒豪の龍が言うと、結構来るもんがあるなぁ。っつーのはとりあえず冗談だが、先輩としては　色々と心配するんだぜ？　これでも」
「……」
　下手な心配をかける事は子供のする事だと言う事は龍は判っている。
　それでも、この感情の根源、その根幹の部分が自分自身でも見えてきてないから、何も言いようがないのも確かだった。
「……オレ自身もよく判ってねぇんだ。だから言いようがない」
「なるほどな。ま、誰しもそう言う歳頃ってのはあるもんだ」
「神城には想像がつかないがな」
「言ってくれるじゃねぇかガキ。オレだって色々経験してきてんだよ」
　軽く笑いを続けると、神城は一枚の紙を渡した。
「ん？　なん……だ……。これ？」
　龍が紙に目を通し続けた所で、段々表情が険しくなっていく。
「見ての通り、ちょっとした辞令だ。最近小火が結構多いらしくてな？　あの小学校の

先生方や生徒達とふれあいながら、街のパトロールする。ほれ　あの小学校、消防クラブっつーのがあって、色々と活動をしてるらしいんだわ。龍が学校で教えたり、実演してたりが結構ウケたらしくて、指名された。まぁ、交流も兼ねての業務だ」

「絶対これ、消防士の範疇を超えてるんじゃないか？　生徒護るのは先生の仕事だろ。同じ公務員ってだけで、何でオレがそこに行かにゃならん！」

それは、今までで一度たりとも無かった事だ。

突然の辞令に戸惑いと混乱が等しく混濁し、盛大に拒否する姿勢を龍は見せていた。

「今は防災予防週間だ。大規模火災が起きた時に、犠牲になりやすいのがまだまだ未成熟な子供達だろ？　迅速な連携を取る為にも、色々とパイプは必要らしいぞ？」

「あのボスにこれ以上なパイプとかいるのかよ！　政界の重鎮ともつながりあるって聞いたし、果ては海外。ＦＢＩやＣＩＡ、ＫＧＢともつながりがあるって専らじゃないか」

「どうだろうなぁ、そこまではあると思うか？」

「あのボスだったらあったって普通に見えるわ！　判ってて訊いてるだろ!?」

神城はカラカラ、と笑っているが　目の奥は真剣そのもの。

ボスは変人である事は周知の事実であり、何をしても、果ては何があっても　最終的には何故か納得してしまうのだから。

「兎も角だ龍。コレは業務指令だ。色々と龍はわがまま言えてるが、何だか今回はテツ先輩も大隊長も妙に推すんだ。最終的には放り込まれるぞ？　色々と覚悟を決めたらどうだ？」

「……はぁ」

盛大にため息を吐く龍。

確かに、龍はこれまででも一度言われた事は　例外を除いて　最終的には従うのが定番になっているから。

上司の仕事命令を部下が訊くのは基本的に社会人として当たり前だと思うだろうが、この消防隊は少し……じゃなく、かなりおかしいから　一般常識は当てはまらない。色々と逸脱したりもした事があるけど。

「……判ったよ。それで、何時から？」

「ああ。えとな……」

神城の笑顔が妙に変わったのに違和感を覚える龍。

この表情になった時、良かった事など一度も無いのだ。それは身に染みてよく判ってきている。その第六感が強く警笛を鳴らし続けているのを感じ、行動をしようとしたが最早手遅れだった。

「今からだ。テツせんぱーい！　ＯＫ見たいっスよ？　連れてきても」

神城の言葉を合図に、ガラっ　と後ろのスライドドアが右に開く。

そこに立っているのは、職場でも人生でも大先輩である淀川鉄先輩と……。

「引き受けてくれるんですね？　ありがとうございますっ！　皆もとても喜ぶと思います！　勿論私もとても嬉しいです！　これから暫くの間　よろしくお願いしますね。真田さん！」

大きなくりっとした瞳をいっぱいに開かせて　弾けんばかりの笑顔を向けて　頭を下げる少女。あの時よりも大きく動作をしているためか、胸元まで伸びている髪が大きく揺れ、髪留めの黒いリボンも揺れた。

頭を上げた時、その少女と目があう。

――……なんだ？　これは……。

その大きな瞳に吸い込まれそうになってしまった。
時が止まったかの様に身体が硬くなってしまうが、何とか始動する龍。
体感時間は果てしなく、長く感じたが現実には1秒程しか経っていなかった様だ。

「……まさか、此処にまで迎えに来てくれるとは思わなかった。遠く無かったか？」
「あははっ！　勿論先生の車があるんですから大丈夫ですよー。運動は得意ですけど、流石にこの距離走るのは大変です」

スムーズに会話をする。
ここが職場である事、そして　横には2名の先輩がいる事も忘れて。

そう――彼女と一緒にいる間、本当に楽しかった。

楽しかったからこそ、目が離せなかったんだとこの時龍は理解した。
単純に、楽しかったのだ。楽しい事に細かい事は関係ない。

そして何よりもこの少女は凄かった。
聡明な少女は小学生とは思えない豊富な知識を持ち、身体能力も抜きんでていた。
色々と実演した龍で、それを少し体験してもらう時間の時に、小学生とは思えない技量で、完璧だと言える実技を熟して見せた。その後の講習会の時のクイズ形式のテストも完璧だった。

学校始まって以来の天才とも呼ばれている少女　天宮　香里。

「改めて――よろしくお願いしますっ！　龍せんせー！」
「こちらこそ」

（・∀・）ニヤニヤ

と横で笑い、肘で突いてくるのは尊敬すべき先輩の神城。
非常に不快だった事と、しつこかった事もあって　龍は足の爪先をとりあえず踏んずけた。
その後は　テツ先輩と香里の２人に付き添い、龍にとって未知の世界とでも言うべき

場所へ赴く。

そう――この時は平和だった。

だが、その平和は瞬く間に崩れ去っていく事を　この時は誰もが思いもしなかったのだった。

3話

□□　天宮家　□□

それはいつもと変わらない平凡な一日が始まる天宮家の朝の事。

その天宮家の一員の彼を紹介をする。

名は、《天宮　晴輝》　天宮　香里の兄である。

春輝は　今朝の光景に少しばかり戸惑ってしまっていた。

太陽がすっぽりと顔を出して周囲を照らし、少々肌寒いがそれでも徐々に暖かくなってきた季節。そんな太陽にも負けない？　と思える程輝かせている笑顔があった。

「えへへ～」

ニコニコと笑顔で身支度を整えるのは、大切な大切な妹の香里。

兄である自分が言えば、妹バカと呼ばれるかもしれないが、聡明であり容姿も整って

おり、何を隠そう世界一の妹だ。
全てにおいて完璧で自慢の妹なのだが――ここの所最近おかしい。
とにかく笑顔が増えた。
元々が笑顔だけれど、上手く説明出来ないが、兎に角違った。
言ってみれば……笑顔の質が変わった？　とも思える。
妹の心の機微程度読めなくて、何が兄か。と言う事で今日こそは色々と訊いてみようと決意。
「なぁ、香里」
「ふんふんふ～～ん♪」
「おーい、香里？」
「あはっっ　ふはっ♪　るんるんるん～♪」
駄目だ、取り繕う暇もない。ご機嫌なのは良い事だが、何だか不快感が何処となく出てきた。妹に対してそんな事を想うなどと、これまでには考えられなかったのに、何故だろうか？
そんな何も耳に入ってない香里だったが。この場にいるもう1人の声は耳に届く様だった。
「香里ちゃん　ほんっとご機嫌さんだね～？　最近良い事あったの？」

それは幼馴染でずっと一緒に過ごしてきた家族も同然の女の子《五月雨　紗月》。
今日も忙しい天宮家の両親が不在の為　朝ご飯を一緒に作って食べる為に来ていたのだ。
そして、もう直ぐ高校1年生。身体も気が付かない内に女の子に仕上がってきている。
そんな年頃の可愛らしい娘さんが男と一緒に長い時間を過ごすなどと、いかがなモノか……、と考えなくもないが、春輝はそんな事は考えておりません。――――多分。
「あっ、えっとね～。ふふふっ　秘密～♪」
「えー、教えてよー」
「う～んとねー。……紗月ちゃんと同じ気持ちになれただけかなっ？　とだけ教えておくねー」
「ええっ！　や、やっぱり　そうなのっ？　香里ちゃん！　わ、わぁ　気になるっ！　とっても気になるよー」
何やら女子同士で大いに盛り上がりを見せている様だ。何処となくおいて行かれた男は寂しい気持ちになってしまうのも仕方ない。
「おいおい。オレを無視しておいていくなよ。紗月は香里の事知ってたのか？　どういう訳なんだ？」

意を決して？　もう一度だけ飛び込んでみる事にする。
台風に飛ばされる蟻んこの様に、弾かれて終わるだけかもしれないけど、それでも最愛の妹や幼馴染に置いて行かれる事ほど、寂しいものはないのだから。
「お兄ちゃんにはまだ早いんじゃないかなぁ？　こーんな身近にいるのに、ちゃんと出来ないんだからさー」
「か、香里ちゃんっ！」
「はぁ？」
ますますを持って訳が判らなくなってしまう春輝。香里はそんな春輝を見てにこっと笑みを見せる。
「だいじょーぶ！　とっても楽しいだけだよっ！　ほら、紗月ちゃんだって毎日たのしそーでしょ？　それと同じだから」
「うーん……、よく判らんが　何だか気になるなぁ……」
「あははっ　大丈夫だよ。ハルくん。きっと直ぐに判るから。すぐに、ね……？」
紗月と香里が意味深にウインクをした所で、家のチャイムが鳴り響いた。
インターホン越しに確認すると、どうやら春輝の友達の小島が来た様だ。
『うぉーい、はるきー！　部活の話だ、話。菊池先輩から』
「んっ？　あれ？　今日は部活あったっけ……、ってあああ!!　こ、今度の大会のミー

ティングっっ!!」

春輝は、生徒手帳をパラパラと捲り、確認したと同時に大絶叫。

昨日の部活。いつもは終了後にミーティングを行う。

だが、顧問の先生の急な事情と部員にも学校行事等が重なった為休日の日に1時間程行おうと、決めていた。

それをすっかりと忘れてしまっていた春輝。

それもこれも、最近妙な笑顔を見せる様になった妹の香里が悪い！　と何処となくいやしい表情を見せてしまいそうになるが。

「おにいちゃーん。忘れるなんてひどいよ？　菊池先輩って人の事すっごいそんけーしてるって言ってたのにー」

またまた、あの笑顔でそう言う妹。

その一言一句、全てが正しいからもう返す言葉も持ち合わせていない。

「わ、悪い！　紗月。香里と一緒に飯食べててくれ！　オレは良いから！」

「ハル君。はい、パンだよ？　少しでもお腹に入れておいた方が良いよ」

「あはははは っ！　ベタだよねー。食パン食べながらダッシュするなんて、とってもー」

「や、やかましい！　さ、紗月　さんきゅーー！　んじゃ、いってくる!!」

渡されたパンを口の中に放り込んで、噛んでロック。
まさに遅刻寸前で朝食を掻き込んで走り出す、ベタなシーンだが　実際に体験はしたくない。走りにくいし、何より腹痛が起こりそうだから。完全に遅刻だから精神的にも肉体的にも。

『ははっ　春輝はしょうがねぇなー。オレが来なかったら　翌日大目玉だったぞ？』
『わ、悪い！　さんきゅうな？　ほんと！』

そして　2人の声が完全に聞こえなくなってきた所で、紗月は笑顔だけど少しだけ真剣な顔になった。
「香里ちゃんに好きな人が出来たんだねー？　ね？　ね？　どんな人？」
春輝にとって最愛の妹なのだから、紗月にとっても長く同じ時間を過ごしてきたため、同様だ。だからこそ、好奇心もあるが　それ以上に心配をしたりもする。
自分自身が好きな人はまるで、全く問題ない。それは香里自身もよく知っている。
だけど、香里の好きな人は　この場では香里しか知らない。全く知らないから　心配になってしまうのだ。
「えっへへ～、とーっても格好いいひとだよ？　ちょっぴり　歳は離れちゃってるけど、

お兄ちゃんよりもずっと！」

何だかとても、とても複雑な事を言ってくれる香里。　でも、その笑顔にはどうも悪戯心が浮き出てきているから、どこまで本気なのか判らない。

「あははっ、じょーだんじょーだん。でも　ほんと素敵な人っていうのはじょーだんじゃないよ？　こんな気持ち、初めてだから　ちょっと戸惑ってるとこもあって……」

香里はそっと胸に手を当てていた。

それを見て、紗月は真剣に　本当に真剣に恋をしているのだと言う事がよく判った。

例え、まだ小学生だとしても、もう直ぐ中学生。もう思春期だって迎えている。それに自分自身は小学校の頃から好きで　今もずっと好きだから　気持ちはよく判った。

「紗月ちゃんが決めた相手だからね。とっても素敵なひとなんだ、って事はよく判ったよ。……それにきっと、難しいかもしれない、って事も」

「う……」

紗月は香里の表情からそれも読み取った。

歳が離れている、と言う事は間違いなく同級生ではない。小学生ではなく中学生？　或いはそれ以上？　と詳しくは判らないし、あまり追及するつもりも今は無い。

「でも、頑張ってね？　私も頑張る。頑張った事は……きっと無駄になんかならないから」

「……そー、だね。うん。そーだと良いな？」
「だいじょーぶ！　香里ちゃんもとっても可愛いんだもんっ！　私が男の子だったら放っておかないからっ♪」
「えへへ♪　そーかなー？　あ、私も男の子だったら紗月ちゃんの事　ぜーーーったいに放っておかないよー。ちゅー　くらい毎日の様にしちゃうからねー♪」
きゃっきゃっ　と話を膨らませつつ、朝食を美味しくいただく2人。
成就するかどうかは判らない。相手がいて、自分がいて　初めて成立する問題だから。
何より紗月は、香里が言っていた『紗月ちゃんと同じ気持ちになれた』と言う言葉から判る通り、まだ一方通行――片思いだと言う事がよく判った。
それでも、この笑顔は本当に愛らしい。
その笑顔が曇る事の無いように　紗月は祈るのだった。

4話

期間は別に決められて無かった。

『あははは っ！　龍せんせーって　なんでも知ってるんですねっ？』
『いや、オレにも知らない事は多いぞ。なんでも知ってる訳じゃない』
『そんな真面目に返さなくたって良いですよー！　『凄いだろっ!?』くらい言ってくれたってー』
『いや、事実だから』

防災期間もとっくに終わっていて、それにて終了！　かと思いきや　色々な理由をつけて龍の配属？　の続行だった。
色々と訊いて見た所、小学校の校長と教育委員会と繋がりがある所長が……どうのこうの、らしい。
そう耳にした時点で考えない様にする龍だった。

面倒だと思いつつも、教える事は嫌いではなく、騒がしいとは言っても消防署の連中と比べたら、あらゆる意味で可愛いものだから、苦ではなかった。
いや、苦などある訳がない。香里との時間は本当に楽しかった。
防災についての講習の筈が、６年生の実力テスト対策を～　と色々言われて　その勉強の面倒まで見る事になったりした。それなりに遅れたものの、基礎的な学力は龍には備わっているし、そもそもが小学生の問題だったから、何ら問題なかった。（シャレではない）
あまり普通好みではないだろうと思える勉強の時も教えている時も、香里は笑顔だった。
『あっ、龍せんせー。今度のテスト！　上位１０に入れたら　ご褒美がほしいですっ！』
挙手をして　そう言う香里。
龍は　軽く考えた後に。
『ん……　この学校は6年だけで２００人以上か。それを１０位以内は凄い事だしな。まぁ　良いぞ。何が欲しい？』
龍がそう聞くと、香里の目がきらんっ☆　と一瞬輝いた気がした。
……何だか嫌な予感がそれとなく感じた。
『はいっ！　龍せんせーと　ちゅーがしたいですっ！　ちゅーがほしいですっ！』

『……はい？』

はいはーい！　と何度か手を上げる香里。

周囲の目などおかまいなく。……いや、寧ろ周囲は煽ってる。殆ど全員が香里の味方と言う感じで。面倒見が良く　学級委員長もしている香里だから信頼関係は間違いなく良好の様だ。

『だから、ちゅーですっ！』

口を軽く前に突き出して目を瞑る香里。

龍の返答はと言うと、掌を香里の顔面に軽く当てる。

『ぶっ！』

『問題だ。そういうの、何て言うのか　判るか？』

『ふがっ、ふがっ　えふんっ。えー　わからないですよー』

『正解は《マセガキ》。学習しとく様に。……そんなん１０年早い』

それを訊いて、今度は唇を尖らせる香里。

他の皆も、『ちゅーしてあげなよー』とか『かわいそーだよー』とか口々に言っている。

全員が笑っているから　本気なのか冗談なのか、いまいち判りにくい。

『でも、ご褒美くれるって言ったじゃないですかっ』

確かにそれも間違いではなかった。

『……最初に内容訊いてなかったのがミスだな。わかったわかった』
無下に断るのも大人とは言えない。ましてや相手は小学生なのだから。
何かを期待している香里を見て、軽くため息。
『ここにな』
『えー、おでこー?』
ぶーぶーとブーイングが飛ぶのだが、これ以上ないと言っていい。
そもそも、小学生相手にしたら（おでこでも）、色々と大変な事になるだろう、と言うが。
『皆先生たちには黙っててくれるもんねー?』
と、香里はニコリ。
ちょっと悪い子な顔をしてる香里に皆が同調している様だ。自由参加と言うだけあって、女子が殆どだったから、と言う理由もあるかもしれない。男子もはやし立ててるくらい。
『天宮も、《何処に》と指定してないだろ？　ならオレの事は言えないぞ』
『ええー、口をこうやってやったよ?』
『言葉にしてないから駄目』
『ぶー、へりくつー!』

香里はどんな事でも全身全霊。
なんでも頑張るし、どんな難しい事でもチャレンジする好奇心旺盛な性格。

それでも、今回の様な事は――今までに一度だって無かった。
皆の前でこんな風に告白の様な事をするなど……。クラスの皆の雰囲気を良くするために率先して面白い事を言ったり、冗談をしたりするのは何度もあったけど……。
間違いなく今回の事は　以前　紗月と話をして　色々と火がついてしまったからだと言う事だろう。

『（えへへー。中学生くらいになったら、女の子として見てくれるかなぁ……。あっそれまでに　せんせーに彼女さんが出来ない［今はフリーなの確認済］って事も無いって言えないし！　今からじゃないと、遅いかもっ!?　よーし、色々とアタックしちゃおう！
あ、次はぜーーったい　下の名前で呼んでもらう様にしよっ！）』
ご褒美の変更は香里はしない。おでこでも　凄く嬉しいから名前は次に、と決めたのだった。

苦笑いをしている龍を見て、香里はただただ笑顔を見せ続けるのだった。

そして、その笑顔に龍も答える。

もう1ヵ月程経つが、毎日がそんな感じで、消防隊とは違った意味で色々と大変だが、

……楽しかった。

あの日以前の自分に　戻れた様な――そんな感覚がしていたから。

場面は変わり、平岡出張所。

「やーっぱ妙に笑顔が増えたと思うんだがなぁー。１０割増しくらい？」

「……」

今　消防所内の休憩室にいるのは２名。

無言なのは勿論　龍であり　その龍にうざい！　と思ってしまうくらい絡んでくるのは、いつもの事ながら天才や超人等　色んな渾名で呼ばれてる神城。毎日飽きないのか？　と言わんばかりに冷やかな視線を送った龍が痛烈な一言。

「うざい」

思うだけじゃ判らないだろうから、はっきりと口にした。

だが、神城は動じない。動じないどころか、次の段階に行動開始。腕を龍の肩に回した。

「おいおい、うざいは無いだろー。うざいは。今日の訓練字ん時　涼しい顔してオレに一撃当てやがって。まーた腕を上げたんじゃねぇか？　龍。どーやら　あの小学校は

通うだけで能力アップが出来るらしいなぁ」
消防士なのに何で格闘技を通常業務に……？　警察とかで銃剣道なら兎も角、筋力トレーニングをするのなら兎も角、とツッコミを入れたい所だが、ここの消防所は常識的ではないからスルーが懸命である。入隊には年齢制限もある筈なんだが、龍が入れている時点でご察し。
「……うっさい」
「長えぞ？　今の間がよ」
龍は　言葉通りウザがっている様子が手に取る様に判るものの、何処か穏やかにも見える。

それが、相手が神城だからだと言えるかもしれない。いや、間違いなくそうだろう。
神城と龍は、言うまでもないが一番絡みがある。第一、龍が入隊した頃から絡んでくる事が多かったから。
最初はテツ先輩と一緒に世話係に任命されたから、２人が一緒だと言う事が多い、と言う理由も勿論あるが　それ以上に龍の姿に、神城は何処か親近感の様なものを覚えた

から。

なぜ感じたのか、その理由は神城自身にもよく判っていない。そもそも龍とは性格自体は正反対だと言っていいし、その他を見比べても　客観的に見ても　正直似てるとは言えなかった。特に入隊当初は。

入ってきた時は人斬りナイフの様な鋭い表情をしていた。

協調性の欠片も無く、何でそんなヤツ入れたんだ？　と言う声がそこらかしこから上がっていた程だった。

その頃から神城は、龍が求める物を判っていた。傍で見ていたから嫌でも判ると言うものだった。

彼は今よりも更に若い頃からずっと『力』を求めていた。

龍のその強い願望。その理由は神城は　本人にからではないが　訊いた事があった。

正直　何故《消防士》に？　とも疑問符が浮かんだが、この職場の環境は最適である事は神城はよく判っていた。

出会いと経験。

初めての敗北。

そして何よりも成長、精神の成長。

力を得る前に習得しなければならない事ばかりが此処では得られるから。

龍は入隊当初、通常業務は完全にパスされていて、主に鍛錬をしていた。不愛想でただ云われた課目を鬼気迫る様子で毎日続けてきた。普通の成人。いや　トップクラスのアスリートでさえ　オーバーワークではないか？　と言われてもおかしくない程の修練。決して手を休めず妥協せず、毎日をぶっ倒れるまで続けてきた。

止めても聞き入れない少年だったが、そこはこの平岡出張所の出番だと言えるだろう。

神城を初めとして、先ずは心から　と言う事で名物の風呂に強制的に放り込んだ。

裸の付き合いは大事と言う事から判る？　様に、風呂場では龍は大人しかった。大人しかった、と言うより色んな意味で言葉が出なかっただけかもしれない。バカ騒ぎをし続ける大人の姿を見て、色々と混乱をしていて　その間を狙って少しずつ心の隙間に入り、今日までのそれなりの信頼関係を築く事が出来た。

話やアドバイス等も聞き入れだした事で効率よくなり、そして何より　恐ろしいまでの執念が、元々生まれ持っていた天賦の才に加えて貪欲な修練は、柔らかい砂が瞬く間に水分を吸収する様に　あらゆる技術を身に付け続けた。

その姿が、神城にとって自分と似た匂いを強く感じた。燻っていた才能が急激に伸び続けている姿を見て。

龍と神城の2人を一緒にさせたのは、相乗効果も狙っていたらしい。
大隊長や所長が　そう　にらんでいたのだが、まさにあっけないと言える程の速度で成長を続けた。身体を痛め続けた後遺症も殆どなく、最年少であるのにも関わらず、この強靭な肉体と精神を併せ持つ屈強な部隊の中でも群を抜く身体能力を持つ神城を唸らせる程になったのだ。並び立つ者が直ぐ後ろに迫ってきて、更にはもう直ぐ隣に立つまでになれば　お調子者感が今一つ抜けていない神城も危機感に似たものを感じ取ったのだろう。より一層励み、部隊全体も向上していった。
この事全てが計画通りだとすれば、やはり所長は恐ろしい。
勿論、龍自身も。若さをも考慮すれば更に恐ろしい。
精神がまだ未熟・未成熟な肉体。自分の持つ器をも超えた、とも言える。

全員が　そんな龍の成長を見るのが恐ろしくもあり――何よりの楽しみだったりした。

「なげえわ！」
「……何に対してツッコンでんだ？」

「さぁな。何だか　そう言いたくなったんだよ」
　神城は、ぼりぼりと頭を掻いた後。
「そろそろ今日の仕事も終わりだ。要請も入ってねぇしな」
「そんな時間か。……ほんっと、神城先輩と話してるとマジで時間が経つの早い」
「おっ？　たまにはオレの事先輩って呼ぶ様に、敬ってもいいんだぜ？　龍よ。さーて、風呂に行くか！」
「……1人で行け」
「あんだよ。つれねぇな。ああ、あれか？　あのお嬢ちゃんと一緒じゃなきゃ嫌ってか？　マセてんよなぁ。でも　可愛いと思うぜ？　あれは将来ぜーったい美人になるヤツだ。今の内に唾つけとくってのも――」
　神城が最後まで言ったのと同時に、龍の右ストレート飛んでくる。
　反射的に神城は首を回して何とか回避。前髪を掠らせるだけに留めた。
「って、マジな攻撃してくんなよ。ビックリするじゃねぇか！」
「減らず口をなくす為には、実力行使が一番だろ？　……正直さっきのは不完全燃焼だったから、続きだ。次は一撃と言わず、2、3発くらいは当ててやるよ」

　龍は、ステップを刻みながら　懐に入って……　はいっ！　ワンツーワンツー、ツー

ツーワン！

「こ、コラ！　んな狭い場所で……　って、あん時より早くなってんじゃねぇか!?　い、いて、いててて!!　掠ってもいてえって！」

神城は回避をしているんだが、無言の連打が続く。

無呼吸連打、と言うヤツなのだろうか　終わりが見えなく　拳の戻りも早い為　カウンターも狙えない。

最終的には、『五月蠅いぞ!!　お前ら！』

と言う大隊長の説教が始まるまで続いたのだった。

「っつぁー。疲れた……。訓練の比じゃねぇよ……」

神城は、ごきっ、ごきっ　と首を鳴らしながら身体を拭う。

「神城が悪いな。あんま龍をからかってやるなよ」

「ははっ、テツ先輩も知ってるでしょー。……アイツには　まだまだ　ああ言うのが必要、だって」

風呂場の方を見ながら神城はそう言った。シャワーの音が脱衣所にも聞こえてくる。まだ風呂場の中に龍がいるのだろう。……或いは神城との時間をずらす為にわざと遅くしている可能性だってある。

「まぁ　判らんでもないが、時と場合を考えろって事だ。大隊長をキレさせるな。こっちも大変になる」

「あー、それは失礼でした。オレにも言える事ですし」

まだまだ龍は成長期。

どれだけ、驚異的に成長をし続けていても……まだまだ学ぶべき事は多い。

色々と先に不安はあるが、それでもそれ以上に楽しみもあったりする。隊員の全員が弟を持った気分だったから。

だが、先を楽しみにしているのにも関わらず、妙な胸騒ぎがした。偶然だろうか、誰も口に出さなかったが、この場にいる神城やテツ先輩は勿論、この場にいない隊員全員もほぼ同時に、何かを感じ取っていた。

そして、シャワーを頭から浴びている龍。瞑っていた目を無意識に開き、振り返った。

「――……」

何かが聞こえた気がしたから。

何かが――崩れる様な　そんな音を。

5話　序章

――何かが変わる。何かが、始まる。

理由は判らない。だけど　昨日からずっと妙な気分に苛まれていた。
だからなのだろうか、何時も以上に神経が過敏になっている。僅かな物音でさえ耳に届く。　そして、これは以前にも確かに感じた事だった。

それは　忘れもしない――全てが変わったあの日。

竜が大地を震えさせ、そして　全てを呑み込み連れ去ったあの日に。

「おーい、龍せんせー?　どーしたの??」

「……」
「龍せんせーーっ　訊いてるのーーー！」
「っ、あ　ああ。悪い」
何人かの生徒たちが龍の服を引っ張り　漸く気付く。
過敏になったかの様に思えたのに　生徒たちの声は中々届かないとでも言うのだろうか？　と龍は何処か自虐的に笑ってしまっていた。
「おおー、漸く今日笑顔見せてくれましたねー？　今日の龍せんせー、ずーっと眉間に皺寄せてましたよー？　そんなんじゃモテないですよー」
あはは、と笑ってみているのは香里。
生徒たちも香里と一緒に笑っている。
それを見た龍は　にやっ　と笑った。にこっ　ではなく　にやっ　っと。
「ああ　そうだな。それは反省する。今後は　なるべく、モテる様に振る舞うとしようか。モテないのとモテるのであれば、前者の方が良いからな」
「……へ？」
香里はきょとん、としたが　更に龍は畳みかける様に言う。
「ん。まずは手始めに　消防署の連中と慰安旅行の時にでも――」
そう、素敵な笑顔でそう言う。

見ていて　とても心が和んでしまうそんな表情。それは生まれて初めて　家族以外の異性を本当に好きになってしまったからかもしれない相手。
その笑顔が、ここから先も大安売りのバーゲンセール？
ここに来た最初こそは　笑顔なんて稀にしか見れなかったと言うのに　それが更に更に周囲に??
街中でそういう事をしたら……、消防署の皆さんは背も高くて　格好良くて、更に渋い所もあるメンバーが揃ってて。
街に出れば女の子達が黙ってなくて

『ねーねー、かっこいい　おにいさんたち～　私達と遊んでかなーい？』

の様な展開が何度も、何度も。
そして、最初こそは断ってたんだけど。

『たまには良いか。ああ、付き合おう』

とか何とか言っちゃって、そのまま夜の街に手を繋いだり、腕を組んだりして　とあ

る建物の中へと消えて行って――――。

「わ、わぁぁぁぁ!!　そ、そんなのダメだよーー!　しょ、しょーぼーしさんが　そ、そんなえ、えっち、えっちな事しするなんてっっ!」

さんざん妄想を膨らませた後、その妄想をかき消す様に両手をぶんぶんと頭上で振って拒否する香里。

それを見た龍は、手に持ったボールペンで香里の頭をぺちんっ　と叩いた。

「あうっ!」

「マセるのは結構。何を考えてたかは追及はせん。……その代わり勉強の方もそれくらい集中しろよ?」

「ぶーぶー、せんせーが女の子をからかうーーっ」

「「あはははははっっ!!」」

２人のやり取りに、笑顔に包まれるこの場。

心地よさを覚えるこの教室。

なのに心は一向に晴れない。……笑っているのに　本当に　心からの笑みじゃない。

一粒の不安が、一粒の闇が心の中に燻っていて、それが邪魔をする。

その闇の正体が判ったのは、直ぐ後だった。

『せんせー!!　た、大変なのっ！　み、みんなが……!!』

教室に飛び込んでくる生徒。
それは　悲鳴に近い叫びで　事の重大さを判らせるのには十分過ぎるものだった。
慌てて駆けつけた先は、体育館。
体育館の中心部に生徒、先生が集まっていた。
足早に駆け寄ると　その集まっている中心には倒れている生徒が、先生がいた。
それも1人や2人じゃない。大勢の人が倒れていたのだ。
「っ！　大丈夫か!?」
慌てて駆け寄る龍。
直ぐに状態を確認するが……、駄目だと判断するのに時間は掛からなかった。意識が無いだけじゃなく、呼吸も心拍音も全く無かった。何人か心肺蘇生を試みようとするが、それでも無駄だった。
「いったい、何があった!?」
最早目の前に倒れている人数全てが死体にしか見えなかった。

見た事が無い、とは言わないがこれ程までの規模ともなると、大規模火事や自然災害クラスだと言えるだろう。
だが、火事にしろ災害にしろ、理由があって　その命が失われてしまうのだ。
この場で起こっているのは異常としか言いようがない。自然に倒れて意識を失い、心臓が止まる、と言うのは存在しない訳ではないが　ここまでの人数が同時にと言うのはありえない。人間はそう簡単に死ぬ様には出来ていないからだ。
何でこうなったのか、推察する事さえできない。つまり原因が全く判らないのだ。だから、怯える生徒達、混乱する先生たちに聞くしかない。
「そ、それが判らないの！　突然みんな、みんなが倒れて、動かなくなって……！　そ、それで……っ」
発狂、とまではいかないが、震えながらそういうのは　以前色々と話をした事のある新人女教師だった。ある意味お互い新人教師？　の様なものだから　少しばかり話が盛り上がったり、香里が盛大にヤキモチを妬いたりとしていたが、それがもう遠い過去の話に思えてくる。
「一先ずは落ち着くんだ。……警察や救急車の連絡は？」
「え、えと　教頭先生が……、１０分くらい前に……っ」
とりあえず　連絡は出来ている様なので　安心……は、まだ出来ない。

生徒達は友達が、先生が倒れてしまった事に、……恐らく死んでしまった事に　泣き叫んだり、蹲ったりしている。正確には判らないが、それでも１０分間も心肺停止をしているのであれば、もう蘇生は無理だ。

「……一先ず生徒達を外に誘導、避難させてくれ。外で救急隊や警察の到着を待つ方が良い」

「は、はい！」

そう言って先生にここの生徒達を誘導させた。

「りゅ、りゅう、せんせ……」

「……天宮。大丈夫だ。皆と離れず一緒に行動をしろ」

香里も動揺を隠す事が出来ず、涙目で龍を見ていた。

そんな香里の頭を軽く撫でた後、皆と合流をさせた。

ここから離した理由は、もしも　この場に倒れている原因が感染症の類であるとするなら？　集団感染し命を落としたのだとすれば？

ここに長く留まってる時点で　もう今更後の祭りかもしれないが、それでも中にいるよりは良い。ここにいる生徒達の為にも。

感染の類の話は口に出さない様にした。更に怖がらせ、パニックを引き起こせば二次災害になってしまうから。如何に先生とはいえ　こんな場面で冷静に対処出来るのも

難しいと思えるから。
その後は中々動く事が出来ない生徒達はいたが　何とか移動を開始する事が出来た。
だが、異常事態はまだ序の口。
後ろで、気配がした。何かが動いた様な音と共に。それは移動をしている生徒達のものじゃない。背後から聞こえてくるのだから。
後ろには　もう物言わぬ亡骸しかいない筈なのに。
出来る範囲で確認をし、救命活動もしたが　助ける事は出来なかった。こんな状況であの状態から再び息を吹き返す事など不可能だ。
不可能の筈、なんだ。
『あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、アアアアアアア!!!』
人の物とは思えない様な叫びが体育館中に響き渡ると同時に、龍は振り返った。
安置させられていた人達が、次々と起きだしたのだ。目を見開き　こちら側へと近づ

いてくる。それは一目で異常だと判った。
見開いた目には、いる筈の無いモノで覆い尽されており、眼球が全く見えない。口からも得体のしれない何かが沸いて出てきているかの様に、ぼとぼと　と吐き出てきた。
「なん、だ……？　これは………」
それは連続の想定外の事態。
現実とは思えない場面が眼前に繰り広げられている。手をこちら側に伸ばし、ゆっくりと迫ってくる姿はまるでゾンビのそれだった。映画の中の話ではなく　現実に起こっている。
そして　それらが友好的な存在ではない、と言う事は直ぐに判明する事になった。
龍よりも後ろにいて、最後に生徒達が残っていない事を確認していた高齢の先生が……。
「ぎや、ぎやあああ！　い、痛い!!　痛いいいぃぃいいい!!!!」
その人間だった者達に捕まり、噛みつかれていたから。いや、噛みつくなんて生易し

いものじゃない。完全に捕食をしようと喰いちぎっている。
初めは脚を、バランスを崩し倒れた所で一気に群がりその全身に喰いついていた。
犠牲となった先生の悲鳴、そして異形な者達の叫び。
それらがトリガーとなり　この場が大混乱に陥ったのだった。

6話

暴動の類であれば、国内外問わずに何度も経験がある。

役職は消防士と言う分類だが、壮大な構想を頭の中に入れている出張所のボスは　消防士と言う範囲内には収まらない。まさに壮大な防災部隊に仕上げようとしているのだ。

『例え地球外生命体が襲い掛かってきても対処できる様にする！』

とか言う子供じみたスローガンを掲げているが　訓練に関しては国内のどの様な部隊よりも厳しい。

龍や神城が参加した国外での合宿（？）みたいな訓練では　アメリカのグリーンベレーとの合同訓練を朝飯前。朝のラジオ体操の様に行わせ、その後はデルタフォースや

フォース・リーコン等々との訓練をしたりもしている。
国外の軍部とのつながりでもあるのだろうか、と言う疑問は今更だから省略するが、事実　アメリカだけではなく　様々な国との演習訓練をしたりして来た。演習だけでなく実践訓練もそうだ。部隊に紛れて沈静化を図り　暴漢共を抑え込んだりもしてきた。
こういった様に様々な経験をしてきたのだが　この目の前に広がる光景は、どれとも当てはまらない。人間が血に飢えた肉食獣の様に口許から血を滴り落としている様な光景は。まるで映画の中の話だ。
だが、生憎これは現実。虚構ではない。
「りゅ、りゅう……せんせ……」
香里もこんな場面に遭遇するなどと、夢にも思わなかった事だろう。
女の子らしく、恋をして　これから始まる中学校生活に想いを寄せて……、仲の良い友達。大好きな兄。……特別に好きになった先生がいて、希望にあふれていたと言うのに、目の前に広がるのは地獄の様な光景だった。
「下がってろ、……香里」
龍は、混乱渦巻く場の中でも冷静に状況を見直した。

最初は思考の渦に身を窶してしまっていたが、それはコンマ数秒レベル。
どんな事が起きても迅速に対応できる防災部隊。理由があってそこに所属をしており、訓練を続けてきた龍は、如何に現実離れをした光景であったとしても、……動ける。
誰一人として動く事の出来なかった。悲鳴を上げるだけでその場に立ち尽くすしか出来なかった。その中で負傷をしている教師の元へと駆け出したのだ。

「りゅうせんせっっ!!」
「そこにいろ！　下手に動くなよ!?　何があっても絶対に守ってやる!!」
「っ……!」

――今度こそ！

それは　龍の想いの中に強く思った言葉。だが、今は強く呑み込んだ。
こんな状況になって、命を落としかねない状況になって漸く、龍は香里の事を……ある人物と重ねてみてしまっていたと言う事に。それは　香里にとっても申し訳ない事だと言えるが、それでも今は何よりも優先させる事があった。これ以上の死者を出さないと言う事。

「あ……。っっ……！」

そして、香里は混乱し続けていたが、それでも龍の力強い言葉が　香里に勇気を与えてくれた。このまま蹲ってしまっていれば、友達が怪我をしてしまうかもしれない。

だから、今は自分が出来る事を　出来うる事を全部やる。と心に強く刻み、震える脚を抑えつつ行動を開始した。

龍の言いつけを守りつつ、皆の事も助ける為に。

無数の化け物に襲われた教師は全身数十か所以上喰いつかれているが、まだ命はあった。そして　身体からは出血もしているが、まだ大丈夫なレベル。だが　これ以上の傷を増やすと危険だ。

龍は駆け出して、群がる人外共を1人1人引き剥がすと奥へと放り投げた。

「しっかりしろ！　歩けるか？」

「う、うぐ、うぐう……、あ、脚が……っ」

恐怖と強烈な痛みの両方が襲い　動けなくなっている教師。肩を貸そうとしたのだ

が。

『うごがあがあああああ!!!』

あの化け物たちが怒涛の勢いで襲い掛かってきたのだ。

動くものを標的にしている様に。

「う、うわあああああああ!」

「きゃ、きゃあああああああ!!」

その悲鳴に反応する様に　化け物たちは一気に散開し、逃げ惑い悲鳴をあげる生徒達襲いだしたのだ。

襲い掛かってくる化け物達だったが、生徒達に触れる事はなかった。

「……悪いが、暫く動けなくなって貰う」

襲い来る化け物達の脚を　素早い動きでヘシ折った。

痛みは感じていない様だが、歩く為には当然脚が必要で、おかしな方向に折れ曲がった脚では　満足に歩く事も出来ず、その場でもがく事しか出来ていなかった。

悲鳴と混乱が渦巻く体育館の中。違った大声が響き割った。
それは、龍の声。大声。
「全員　バラけるな！　落ち着いてオレの指示に従え！」

その声量は、身体全身に叩きつけられる様な錯覚を感じる程だった。
否応にも頭の中に叩きつけられる。まずは大人である教師陣がその言葉に従う姿を見せた。まだ、若いとはいえ防災部隊としての経験が多く、信頼できると思ったからだ。
何より……襲い掛かってきている化け物達を瞬く間に行動不能に追いやっている姿を見れば、誰でも従おうと言うものだ。
そして　生徒達も同様。
まだまだ、下級生たちは恐怖から泣き出したり、パニックになったりする子が殆どだったが、そんな下級生たちを上級生たちが6年生達が中心となって支えて、まとまる事が出来た。
「これは、訓練だ！　避難訓練だ！《お・は・し・も》前に教えて予習もさせたよな!?

忘れてないだろ!?　だが、状況に応じて《は》の部分は　走れ！　に変えろよ！」

龍の声かけに皆が頷く。

だが、正直な所　ここに集まっている人数は化け物の数より多い。その上　出入り口が4カ所しかない体育館で　全員が脱出するのは困難だと言わざるを得ない、と言うのが通常だ。

順番待ちの時間が何よりも怖い。直ぐ後ろで犠牲者が出だしたら　もう恐怖心を抑える事が出来ないだろう。そこからは押し合いが始まり　犠牲者が跳ね上がるだろう。

それをよく判っているからこそ、最後尾（しんがり）には龍が立ったのだ。

「ここはオレが対応する。先生達は　生徒達を、怪我人をここから逃がしてくれ。安全な場所……は　正直判らないが、それでも　このあいつらと同じ空間に居続けるよりは良い」

「わ、判りました！」

脚を負傷した教師を同じ教師に任せ、他の生徒達も同じく任せた。

龍の言葉にうなずくと、そのまま生徒達を外へと連れ出していった。

「先生は!?」

香里が後ろで叫ぶ。

一緒に行こうよ！　と続けて叫んでいるが、龍は首を横に振る。
「こいつらが邪魔だからな。一緒にはいけない。だが　片付けたら行く。先にいってろ」
「で、でもっ！」
「オレなら大丈夫だ。香里」
龍は一回だけ、一回だけ振り返ると。
「後で行く。約束だ」
短くそう言った。
それだけでしか言えない。もう目の前には　迫ってきているのだから。
「っ……うんっ。　絶対、絶対に戻ってきてよ！」
「ああ」
香里はそう告げると、皆と一緒に駆け出した。
それと同時に　龍も駆け出した。

――この化け物……1人残らず、ここに留める。

幾ら異形な姿になってしまったとは言え、ほんの数時間前まで、話をしていた相手だ。

時には面白おかしく、時には真剣に。ありふれた話をしていた。突然配属になったとはいえ、短い時間だったとはいえ、自分の教え子でもあり、教師に至っては同僚。仲間でもある。

そんな人達に手を上げるのは、正直心が痛む。……が　それでも、一目見たら判る。目の前の大勢の人達は、もう　元人間であると言う事。そして　もう手遅れの可能性が極めて高いと言う事が。

あの時の彼らは間違っても　肉を求めて狂気を剥き出しにし、得体のしれない蛆虫を身体中から沸き出したりはしていないのだから。そして、医療分野においてもそれなりの知識を持つ龍だったが、これは見た事も聞いた事も無い症例。そんなものをこの街で研究して、特効薬の様なものを作ってる病院なんてある筈がないのだ。

「……ほんと悪いな。暫くは動けなくなって貰う。治療費くらいは出してやるからよ。勘弁しろ」

龍はまた、『悪い』と口にしつつ、化け物たちを無力化していくのだった。

この時は目の前の脅威を取り除く事に集中していた龍だったが、それでも最悪の想定

は常に頭の中に描いていた。

□　この現象が、この小学校だけでなく、街中に広がっていたとしたら？

□　そして、もう街中に蔓延し　ここから逃げたとしても　もう逃げ場など最初から無かったとしたら？

今は訓練を積んだ自分自身が対象出来るからこそ、如何に多勢とはいえ押し留める事が出来ているが、普通の一般人であればそうはいかない。この化け物達の性質。人間を食すると言う異常な行為を除いたとすれば、身体能力自体は　普通の人間よりも動きは遅いがそれでも力は普通の人間と変わらない。

集団で襲われでもすれば、一般人であれば勝ち目はない。

「……今は　考えても仕様がない。今はこいつらを抑えて、ここに閉じ込めたら　移動開始だ」

龍は様々な想定を頭に浮かべつつも一度それ以上考える事を止めて目の前の脅威に集中した。

そして――龍の想定していた考えは、的中してしまう事になるのだった。

7話

――今はこの場所から逃がす。

幾ら体育館は広いとはいえ、化け物の人数もそれに見合うくらいはいるのだ。
人を喰らう化け物に囲まれでもすれば、負傷者が更に増えるかもしれない。

そして――ありきたりだとは思えるが。

「(あいつらに噛まれるのは、危険かもしれんな)」
あの化け物が所謂ゾンビだとするのなら、定番かと呆れられるかもしれないが、そのウイルスか何かが感染し、広がる可能性が高い。噛まれたらどうなるのかまだ判らないが、あの化け物達は噛む力には遠慮が無い。一般人であっても、噛む力は人間の肉くらい簡単に噛みきれるのだから。噛み傷は鋭利な刃物で斬られるより、傷が広がって更に危険な場合があるのだ。

だが、それは当然　噛む事が出来たらの話だろう。

「ふんっ！」

組み付こうと、伸ばした腕を躱し、水面蹴りを放つ。倒れた化け物は後続の化け物にとって障害物となり、更に倒れ続ける。一度絡まれば起き上がるのに時間が掛かる。

「(その間に、3，4人は無力化出来る)」

素早く歩行不能にさせる為、膝を潰す。

ごきゃっ！　と鈍い音が聞こえ、骨が砕ける手ごたえもあった。……当然　良い気分じゃない。化け物の中には子供だっているのだから。

短い時間ではあったが、……教えた生徒達で　慕ってくれた生徒達なのだから。

「(……今は感情を殺せ。最善を尽くすために)」

龍はただただ、感情を押し殺して、最短で最速。そして　無駄に傷つけない様に無力化していった。一体何体いるのか判らないが、それでも　直ぐに化け物の山になった。

其々の重みで身動きが取れない者もいるが、腕だけの力でも移動をしてくる個体もいた。

その手の空いてには体育館にある扉のカーテン等を縄状にして縛り上げて動けなく

する。

「これで、最後……！　よし、次は外……っっ！」

ここで、漸く気付く事が出来た。

体育館内は音が響く。故に化け物達の呻き声が四方八方に響いてきて、判らなかったんだ。

体育館の外の惨状に――――。

この騒ぎは、学校内だけではなかった。

体育館の外は　中以上に悲惨だった。目に入るのは逃げ惑う人達。そして　無情にも捕まり、生きたまま喰われ続ける人もいた。

『うわぁぁぁ!!』

『い、痛い!!　痛いいいいいい!!!』
『許してええええ!!　うわぁぁぁぁぁ!!!』

制服姿じゃない子供達も沢山いた。学校に逃げてきた者達もいたのだろう。或いは逃げてきた人達が、更に化け物達を引き連れてきたのかもしれない。
「くっ……そっ　がぁぁ!!!」
眼前に広がる光景。……悪夢の光景。
それはあの時のと、何ら遜色ない。
そう、力を欲した理由は……。

「このっ!　くるなっ!!」
目の前にいるのは、懸命に自分よりも小さい子達を守っている女の子。

その小さな身体で動き周り、掃除道具等を利用して　必死に防衛をしている。
そして……あの子もそう言う子だった。
困ってる子は決して見てみぬ振りなんかできなかった。泣いてる子がいたら、絶対に駆け寄っていた。そして――自分の事を兄の様に慕ってくれた。
「絶対に皆と一緒だから！　皆で脱出をっ！」
怖がる皆を懸命に鼓舞し続ける。恐怖のあまり動けない子も懸命に庇いながら。

もう、二度と失いたくない。
もう、あんな想いは……二度としたくない。
もう、奪われたくない。
あの時、全てを奪っていったのは大震災による津波だった。
そして、今回　あの時の様に奪おうとしてるのは。

「香里ちゃん!!　危ないっっ!!　後ろぉぉっ!!」

「っっ!!」

同じ災害。だが少し違うのは原因不明である事と、今までは映画の中でしか存在しえなかった生物災害(バイオハザード)。

それでもこれは映画なんかじゃない。現実に起こっている。現実に起こって、また自分から奪おうとしている。大切なひとを……。

「させて……たまるかぁぁぁぁ!!!」

握りしめた拳。想いを乗せた拳は正確に眉間を捕らえた。

全速力だった事と元々の力、体重。一点に込めた力は　いつもよりも威力が数倍にはねあがる。幾ら子供の姿をした化け物であったとしても、人間を殴り飛ばすなんて現実的じゃないだろう。

でも、彼はやった。

香里を背後から襲おうとした化け物は、殴られて吹き飛んだ。後ろにいる化け物達を巻き込みながら。

「りゅ、龍せんせー!」

「よく頑張った!」

軽く頭を撫でると、直ぐに周囲を確認する。
四方八方、視界のどこにでもいる化け物。そんな中で何処が一番安全なのか。……何処に移動をするのが最善なのかを瞬時に頭の中で思い描く。
そして――決めた。

「全・員!!　動けるヤツは　校舎の中に走れ!!」

向かわせた場所は学校内。
一件逃げ場がないと思えるが、それでも襲ってくる方向は良い場所を取れば一方向しかない。開けた場所では四方八方から襲われ、最終的には数にものを言わされてしまうだろう。
そうさせない為にも。常に一対一の状況を作り出す為にも。

そして、悲鳴の渦の中で誰もが混乱していた。恐怖のあまりパニックを起こしていた。
でも、そんな中ではっきりと悲鳴じゃない声が聞こえた。それも　何かを指示する声が聞こえてきたのだ。それが、希望なのだと。この恐怖から、危機から救われる可能性

があるのだと、本能的に感じ取る事が出来た。
逃げ惑いながらも、其々が方向を変えた。校舎の方へと向かって。
それを確認すると同時に。
「香里、皆を連れて校舎に向かって走れ」
香里にもそう言った。
香里が守ろうとしている子達は、後ろに何人もいる。逃げ惑う子達を集めて、それであの化け物から懸命に専守防衛を果たしていた。
確かに、最初と比べたら随分と数が減ってしまっている。
体育館を出る前は、まだまだ沢山いた筈なのに。
それでも、すべき事は決まっている。
「全員で生き残るぞ。もう、誰一人欠ける事なく」
「う、うんっ！　皆‼　頑張って走ろっ！　今は校舎の中に！」
香里は、校舎の中は逃げ場がなく危険だと判断していた。
だから、囲まれたとしても　外に逃げた方が助かる可能性が高いと思っていた。
でも、龍は全く別の指示をした。逃げ場が無くなる可能性が高いのに、その場所へと行け、と。危険だと思ったが、香里にとって信じるに足る言葉だった。
本当は自分も凄く怖かったけれど。下級生の前ではしっかりしないと、と。必死に言

い聞かせていたんだけど、今は違った勇気が沸いてくる。
これが……龍の言葉だからだろう、と理解するのは遅くはなかった。
「走れ！　全速力だ!!」
『はい!!』
龍の指示にしたがって走り続ける。
それに反応して、化け物たちも追いかけてくるのだが。
『そっちに行くんじゃねぇぇぇ!!　こっちだ!!　こっちにこい!!　かかって来い!!!』
突如響き渡る怒号。
その雄叫びは　生徒達を襲おうとした手を、ピタリと止めた。声に、音に反応すると言う事がこの時判った。
「りゅ、りゅうせんせーー!!?」
襲撃がピタリと止んだ理由は、この辺りの全ての化け物をその身1つに引き寄せたからだと言う事が判った。逃げやすくなった代償が龍が引き受けてくれたからだと言うことを。……そしてそれが自殺行為だと言う事も直ぐに。
「や、やめてぇぇ!!」

香里も思わず足を止めて叫んだが。
何十人と突進していった化け物の群が止まっているのを見た。
「は、はは！　こちとら毎日オレより数段デカいヤツとやってきてんだぜ……！」
龍は、1体の化け物の身体を投げ飛ばすと。
「お前らなんぞに負ける訳ないだろうが！」
そのまま、襲い来る化け物達を蹴散らした。
その姿は、体育館での攻防とはまた違った。
あの時は、まだ人間として見ていた所があったのだ。襲ってきていても　つい数時間前までは普通の人間で、楽しく話していたのだから。
だが、この光景を見て　何人も喰い散らし　何人も殺しているのを見て、考えを改めたのだ。
もう気遣う事はない。

少しでも気遣えば――その分人が死ぬ。
相手は――災害そのものだ。
幼いあの日。日本を襲った大震災、大津波。あれと同じ。
そして、アレから助ける為に。もう二度と失わない為に力を付けた。
そして身に付けた力を出すのは今。
何十人いた化け物は、瞬く間にぶっ倒された。
目の前の光景に唖然とするのは、足を止めていた香里だった。
「……オレは何でも知ってるだけじゃない。なんでも出来る。……お前の為なら」
立ち尽くしてる香里の前にまで来て、笑うのは龍。
「あ、あはは。あははは っ！」
香里は　漸く笑顔を出す事が出来た。
心から安心する事が出来た。
「さて……、連中は当分は減りそうにない。さっさと中に入るぞ！」
「はい！　って、わぁっ！」
龍は香里の身体をひょいと抱きかかえる。俗に言うお姫様抱っこ。
「少し急ぐ。前の皆に追いつくぞ。香里もしっかり捕まってろ」
「っ……うんっ！」

香里は、きゅっ　と龍の服を握りしめた。
そして、その後はまるで乗り物にでも乗ったかのような勢いで走り出した。
香里は振り落とされない様に必死にしがみ付く。

こんな最悪な日なのに。……沢山の人が亡くなってしまった事態だと言うのに、香里は　温もりを強く感じる事が出来たのだった。

8話

校舎内へと皆を誘導する。
負傷者は多数いて　パニックを起こしているが龍の声で何とか逃げる事が出来だしていた。
「皆！　頑張って！　こっちだよ！」
香里自身は最初こそは　龍に先に行けと言われていたのだが、龍と共に残った。
まだ、沢山いるから。泣いている低学年の子だっている。自分自身は最上級生である6年生だ。少しでも皆を助ける為に。そして　何より隣で戦い続けている龍の助けになる為にと　先に逃げる事を頑なに拒んだのだ。
龍は香里の事を何よりも優先に、と考えていたのだが、コンマレベルの時間の差が明暗を生む事を理解していた。押し問答を続けていけば　状況が悪くなるとも思っていた。だから　比較的目の届く範囲にいる事を条件にして了承した。
「ち……っ　人の多い所に集まる習性でもあるのか？　こいつらは……！」

学校門は龍の手で閉じられたのだが、その程度のでは防壁にはなりえない。容易に乗り越え続けているのだ。最初こそある程度の足止めは出来ていたのだが、1人の化け物が倒れると、更にその上に、上に、と化け物の山が出来あがり　それを便って　門を簡単に超えてくる様になった。勿論普通に壁を乗り越えてくる者たちもいるから、増えていく一方だ。

それでもどうにか全ての生存者たちを校内へと誘導する事が出来た。もう外にいるのは人ではないものだけだ。

「香里！　もう殆ど生存者は校内に入った！　もうお前も行け！」

「あっ、はい！　龍せんせー！　だから、先生も早く！」

「判っている」

素早く香里の元へと行こうとしたその時だ。

〝どがぁぁぁっ！〟　と言う轟音が周囲に響いた。それがいったい何なのか、理解するのと同時に　それは香里に迫っていっていた。

「え……？」

「っ!!　香里ッッ!!」

それとは……　学校の壁をぶち破って入ってきた大型バスだった。

運転席にいるのは　人ではなかった。無数のあの化け物が集まっており　その場所

を埋め尽くしている。……恐らくはそのせいでアクセルを踏み込んでしまっているのだろう。そのせいで暴走してしまっている。暴走する鉄の箱はまさに凶悪な凶器だ。

無数の人間を、そして化け物を轢いてきているのが、遠目からでも判る程、血がこびり付いているのだから。

その凶器が次に向かう先は……香里がいる場所だった。

龍は　呆気にとられる事もなく瞬時に香里の元へと駆け出し、飛びついた。

後ほんの数秒。コンマ数秒遅ければ、香里諸共轢かれてしまっていた事だろう。間一髪で躱す事が出来た。香里を庇う様に抱え込んでいたのだが、それでも身体の所々に擦り傷が出来てしまった。幸いな事に大事には至っていない。

「はぁ、はぁ、はぁ……っっっ」

「……ふぅ。偉いぞ。良く泣かずに我慢した」

あの瞬間、まさに死ぬ直前だったと言って良いだろう。走馬燈だって頭の中を過ぎっていても不思議じゃない。それ程までに間一髪だったから。小学生離れしている力量と頭、判断力を兼ね備えていた香里であっても、ショックのあまり身体を震わせていたのだから。

「りゅ、りゅう、せん……、りゅうせんせ……」

「大丈夫、大丈夫だ」

ガタガタと震える身体をしっかり抱きしめると、龍は香里を腕に抱いたまま立ち上がろうとしたその時だ。

突然の大型バスの侵入。

そして、その暴走車が香里を轢こうとしていた事実。

間一髪で助ける事が出来たこの瞬間。

これだけの条件が揃ってしまえば、周囲の警戒をしていた意識が逸れてしまったとしても仕方ない事だ。幾ら数々の経験と訓練を積み重ねてきた龍であったとしても　今度は必ず守ると誓った香里が死ぬかもしれない状況で、助ける事が出来た。その　あまりの安堵感が気を緩めてしまう結果になってしまった。

だからこそ、暴走車から飛び出していた数体の化け物の接近に気付くのが遅れてしまった。

『アアアアア!!!』

目の前に迫ってくる化け物。動けない香里。悪条件が揃い過ぎているのだが、撃退す

る事　事態は訳はない。

「うるせえよ！」

左腕で香里を抱えている。空いている右の拳を握り絞めると迫る化け物の頭部に向けて思いっきり振り抜いた。口許付近に龍の拳が直撃し、化物の頭自体を胴体から千切り離す程の威力。吹き飛んで、そのまま接近してきた他の化け物も巻き込み、目の前に道が出来た。

「……ちっ」

見事に危機を突破したかの様に見えたのだが……、拳に違和感があった。

ぶち折った化け物の歯が数本拳に突き刺さっていたのだ。この瞬時の攻防で　冷静に部位を狙っての攻撃は出来なかった。反射的に拳を振るっただけだったから。……口許と言う一番危険な場所に。

「(これは　噛まれた……と言う事になるのかもしれないな)」

噛まれてしまったらどうなってしまうのか、まだ判らない。新種の危険生物であるのなら兎も角、明らかにこの襲ってきているのは元々は人間だった筈だ。何らかの影響でこの様な変わり果てた姿になっている筈だった。その原因は今判る筈も無いが、定番だ

と言えるのが　接触感染。つまり、噛まれてしまえば……。

「（今はそれどころじゃない、か。……それに、もしもの時がきたなら、自分のケリは自分自身でつける）」

龍は拳を振るって歯を落とす。滲んだ血を服に擦りつけて止血をし。

「香里。少し揺れるぞ。しっかり捕まってろ」

「あっ……っっ、りゅ、りゅう、せんせ……」

「喋るな。舌を噛む」

龍は香里を抱えてそのまま駆け出した。暴走者は学校の校舎に当たってどうにか止まる事が出来た様だ。……最悪な事に学校に風穴を開けて。

「今は嘆いても仕方ない。……何処か、広めの部屋を確保しないとな」

「あ……あ……」

香里はまだ上手く言葉を発する事が出来なかった。だが、それでもはっきりと見てしまったんだ。龍の拳を。……数本の歯が拳の皮を破り、刺さっているのを。自分を守る為に。

そして　その事実が　後に香里の首を絞める結果になってしまうのは　もう少し後

の話である。

「さすまた、竹刀、木刀……　包丁類、はリーチが無いし危険か」
校内へと逃げ込む事が出来た中で、龍は大人達の前にいた。
数が多いとは言えないが十分はある。

それなりに使える武器が教卓の前に並べられている。
そして、眼前にいる教師たちは皆が疲れ切っていた。
何とか化け物達を追い出し、バリケードを作り　簡易ではあるが安全地帯を確保する事が出来た。それでも、その結果何人も殺されてしまったのだ。そんな非日常的な光景を見せられて、普通落ち着けている方がおかしいだろう。
「こんな事態になって混乱するのも判る。……いったい誰が想像できるって言うんだってな。こんなＳＦホラー映画の世界にいきなり放り込まれるなんてな」
自身が所属する部署の上司が異常だったおかげで、龍は今何をすべきか、優先すべき事はなにか　と直ぐに状況を把握し行動、指揮も取る事が出来た。
だが、状況は悪くなる一方だ。徐々に多くなる化け物の数。今は抑える事が出来ているが、今後どうなるか判らない。突破される危険性だって十分にある。如何に強固に固めたとしても、先ほど外であった様な暴走車みたいなものが突っ込んでこないと言う保証なんてどこにも無いのだから。
「それでも。……子供達を、生徒達を助ける事が出来るのは先生達、オレ達だけだ」
龍ははっきりとそう言った。
今ここにいる大人の数と子供の数。圧倒的に大人が少ない。全員を守り抜く事は誰が考えたって無理だと言うだろう。

警察も消防も今は繋がらなかった。
今の事態が街中にあふれてしまっているのであれば、それは仕方ないと言える。

「今戦えるのは、オレ達だけだ」

だが、それでも強く訴え続ける事しか出来ない。
いきなり戦えと言われても、『はい。判りました』と言って武器を手に戦うなんてそれこそ無理な話だ。教職員が避難訓練はしたとしても、戦闘訓練をしている訳がない。一部の体育教師は、剣道や柔道といった武道を嗜んでいる様だったが、実戦とスポーツの違うは嫌と言う程判っている。
でも、言わなければならない。鼓舞をして緊張感を保ち続けて貰わなければいけない。

「もう……誰一人死なせたくない。頼みます。力を貸してください」

そして　龍の言葉に、真っ先に反応したのは　この場の先生ではなく。
「私だって戦えるよ!!　せんせー!」

香里だった。
その手にはさすまたが握られている。
「ユーチューブにもうアップされてたよ！　私以外の6年生の皆も戦い方も大体判ったから！　子供だからとか、関係ないよ。1人の人間として　全力で戦うから。私は逃げないから！」
その言葉が切っ掛けだった。連動する様に先生たちも其々武器を手にしていたのだ。
「天宮が此処まで頑張ったって言うのに、大人のオレ達が何もしない訳にはいかない……よな」
「ふふ。……日ごろ頼りなーいって言われちゃってるし、ちょっとは格好いい所見せたいかな。私は」
「誰かを守る為に戦うなんて事　滅多にない。でも、何だか誇らしく思う。こんな僕でも守れる。……教師になって良かったって心から想える」
皆の目に光が宿ったのを見た。
だが龍は　迷っていた。正直に言えば、他の誰よりも香里危険を冒してほしくないと思っていたのだ。でも、ここで拒否をしてしまえば、点いた僅かな火が消えてしまうか

もしれない。
私情を、自分自身の心を殺す事が今の龍には難しかった。……嘗て守れなかった事実が彼の心を深く抉ってしまっているから。
だが、そんな中で。

「ふふっ、でも危なくなったら龍せんせーが助けてくれるから、私達は大丈夫だもんねー。だから、他の先生たちも頑張ってねー」

陽気な香里の声が響く。
その言葉で更に場が賑やかになる。……龍の心にも直接響いてきた。
他の教師たちは、悔しそうにしていたが、それが逆に更に鼓舞する結果となった。つまりは結果オーライと言うヤツだ。
香里は、ニコニコ笑いながら、奮起している教師たちの間を縫って　龍の元へと行った。
龍も、もう覚悟を決めた様だ。香里の様に笑顔を見せていたから。
「……約束、したもんな」
「そーだよ！　約束……したもん。絶対に、絶対……だよ？　せんせー……」

香里は、そっと龍の手を握った。その手には包帯が巻かれている。

「ああ。約束だ」

ズキリ、と鈍い痛みが拳に感じる。それでも　しっかりと握り返した。

心の中で『必ず守る』と　香里に何度も何度も誓いながら。

9話

あれをなんと呼べば良いだろうか。
一先ず名称を付ける事で、解説や詳細が分かりやすくなるだろう、と龍は考えていた。
今後の事にも必ずこの情報は必要だから。

まだ十分な情報を得られていない現状と生存者の多くは子供であると言う事実。
この小学校に一先ず籠城し、外部からの助けを待つのが一番だと判断した。幸いな事に学校は堅牢な建物だ。出入口さえ抑えれば、侵入される事は無い。

最初に話を戻そう。あれは所謂ゾンビと呼べば良いのだろか。
人間だった頃は何度も話して　勉強を教えて、……そして教えられて。自分自身にそんな事が出来るなんて思っても無かった。自分の世界を広げてくれた人たち、未来があったはずの子供達。そんな彼らをゾンビなどとは呼びたくはないのが本音だったが

一先ず感情は抑えようと思う。

「……あいつらの特徴は　大体掴んだな」

龍は机に置かれたノートに素早く書き込みを続ける。情報を残し、伝えていく事で生存率を上げる為だ。

①　正常な人間と比べて判断力は著しく低い。

②　音に反応し、視界に入れば襲ってくる為　視力や聴力はある。（基本一般的であり突出はしていない）

③　筋力はその年齢に応じて多少違いはあるが　平均値である。

④　身体の中は蛆（不明）が発生している。（解剖しなければ詳細は判らない。専門家がいないと言う事と、現在、あれらが生きているのか、死んでいるのかの判別がつかず法にも触れる可能性がある為　現状は行わない方向で）

⑤　人間の肉を食べる。それ以外の食糧や動物には興味がない。

⑥　歩く速度は早歩き程度。

⑦　現れた時間と増えていく数から察するに、（範囲はこの周辺地域に絞られるが）人口の2割は　感染？　したものと推察される。

「……こんなものか」
一息つき、ペンを置いた。
まだまだ調べるには時間が足りない。そして　時間は有限ではない。
この異常事態。この後に何が起きても不思議ではないから悠長には構えてはいられないと言うのが本音だ。……極論すれば、更に力を増した本当の化け物が現れた所で不思議じゃないのだから。
「映画とかだったら、そう言う展開になるんだろうな。……生憎、ノンフィクションだ。つまらないだろうが、遠慮しておく」
「うんうん。それでー、映画だったら　格好いい主人公に惚れちゃったヒロインがつきものだよねっ？　りゅーせんせーっ」
やや前傾姿勢で座っていて、まるまった背中に軽い衝撃があった。
声からでもよく判る。香里だと言う事が。
「そっちの方は大丈夫だったか？」
「ぶー。ガン無視してくれちゃったねヒロインが来たのにっ！」
ぷくっ　と頬を膨らませていた様だが直ぐに気を取り直して説明をした。

「うん。大丈夫だったよ。下級生のコたちはやっぱり　まだまだ不安があって泣いちゃうコとか多かったけど　泣いちゃうコより年上のコが支えて、支えているコを更に年上のコが支えて……って繰り返して貰って、何とか平常を保てる、って感じかなぁ」

「……そうか。よくやったな。この手の状況でのパニックが一番怖い。二次災害でも起きれば、一気に大参事になるからな」

閉鎖された空間。

それも外には死が待っている。

そんな場所で何時までもいれば精神の1つや2つ崩れたって不思議じゃない。普通の小学校なのだから当然だ。それらを守るべき大人の絶対数も少ないから。

「だいじょーぶ！　みーんな、龍せんせーの事信頼してるもんっ！　だから、みんな希望だって持ってる！　一応、頑張ったつもりだったんだけど……、大体せんせーがやってくれたからねー……」

さすまたを担ぎながら苦笑いをする香里。

今でこそ悠長に話しているが　ほんの数時間前まではこの学校内も修羅場。惨劇の場。阿鼻叫喚の四字熟語が一番当てはまる様な空間だった。　逃げ惑う者達も多く、外から逃げのびてきた者達が中へ入ろうとし、更に呼び寄せる結果となって悪循環が続いていた……が、それに歯止めをかけたのが勿論龍だった。

先生方と協力し、靴箱や机等を積み上げ、通路を簡易的ではあるが狭くし　一度に侵入できる数を制限した所で、一体一体を確実に止めていっていた。ものの一瞬で四肢を潰し動けなくした所で外へと放り投げる。……そして　当然ながらもう助けるのは無理だと判断している為、その命をも奪う事もあった。今を生きている者たちを第一に考えて行動し続けた。

結果、被害は最小限に抑え安全地帯を確保する事が出来た。

死体の山は、視覚的には最悪の一言だが詰みあがる事で障害物になり、視界を遮る事にもなる。そして　新たに逃げ込んでくる者達がいないとも限らないので、今も見張りをたてて監視はしている最中だ。（勿論安全地帯で）

「全員の力だ。皆が出来る事を最大限にしたおかげで今があるんだぞ。はき違えるなよ」

「はい！　せんせー！」

香里は直ぐに笑顔になった。何度も聞かされた事であり　自分も役に立っている、と言う事を龍自身の口から聞きたい為　作為的に……　と言うのはまた別の話。

「ん。家庭科室の方はどうだ？　非常食の備蓄状況とかは」

「あ、はい。一応防災対策の１つでもあるし、ここは避難場所にもなってるから　かなりの量がありましたっ！　なので、最低でも４～５日は水と食料には困りません！」

「了解。……そろそろ香里も疲れただろ？　休んでて良いぞ」
「……と、言う事はここで　ごろんっ！　となって良いって事ですかっっ!?」
「はいはい。それくらいは許しても良い、って思うくらいの活躍は十分過ぎる程してくれてるからな。……特別サービスだぞ」
龍は、長椅子に座るとぽんぽん、と膝の部分を叩いた。
何度か休め！　と言ってるのに　やる！　と聞かない香里。
どうしてもー　と言うなら　龍も一緒に！　と我儘を言いだす始末だ。　当然、目に見えてヤバくなっていたら力づくでも……　と思っていたが　香里は文武両道。その小さな体に（本人には言わない）どこにそれだけの力があるのか？　と思う程の仕事量を熟していた。

大丈夫だと言う事は十分すぎる程判ったが、やはり休息は必要だ、と言う事で安全を確保する事が出来た今、多少の我儘は聞いてやろうと判断した。
「えへへへ～」
香里はちょこん、と横に座ると　頭を龍の膝の上に乗せた。
そんな香里の横顔を龍は撫でながら言った。

「……無理はするなよ。連絡は取れたのか？」
「……」
笑顔だった香里の顔が……直ぐに陰た。
「……連絡は無いです」
「そうか。……」
携帯を使って　親との連絡はどうにか取る事が出来た。
大好きな紗月との連絡を取る事も出来た。……一応、香里にとっては最悪な兄『クズ兄』とも　取れてしまっていた。
そして、最後にもう1人……　大好きな方の兄と連絡が取れたのであれば　これ以上ないくらい安心出来たと言うのに。
「大丈夫だ」
「……はい」
「お前の兄なんだろう？　――――なら優秀だ。それに此処でも十分避難出来ている。きっと、大丈夫だ」
「……は、い」
「不安なら、オレがついててやる。……絶対、大丈夫だ」
「……う」

香里の目から一筋の涙がこぼれ落ちる。
「せんせーの『大丈夫だ』は凄く、安心できます。……ありがとーございました」
「あぁ。これでも　なんちゃって教師だからな。それなりにはやらないと、だ」
「あ、ははは……　十分すぎる程、せんせーですよー……。とても素敵でかっこういい、せんせー、です。　……すいません。ちょっとだけ……、ちょっとだけ、休み、ます」
「おう。……おやすみ」
香里は、そのまま目を閉じ僅か数秒で寝息を立てていた。
この極限下の中で　これだけの仕事量。当然身体の限界はとうに超えている。……ただ、それを理解してなかっただけだろう。疲労を思い出したから　直ぐに寝てしまった。

「……ッ。さて、……と」

龍は香里を撫でつつ、空いた方の手。右手をぎゅっと握り拳を作り、そして広げた。
血はもう止まっているが……、噛まれてしまった事実には何ら変わりはない。
そして　これが何よりも皆を不安にさせた一因。

――情報⑧

噛まれた人間は――死ぬ。

１０話

恐らく　生きてきた一生の内で最も長い一日だったと全員が思っている事だろう。
学校内に残っているゾンビを全て無力化した後はその範囲を広げる事に着手した。
一番の問題は　大きく破壊された学校の壁だ。暴走バスが突っ込んできて破壊された学校の壁は、ゾンビたちの出入り口になってしまっているから。
だから、そこを放置された車数台で強引に塞ぎこんだ、前線に龍が立ち　一匹され侵入をさせず　その間に先生達が車を用意する。その連携で一先ず侵入を防ぐ手立ては出来た。
知能が殆ど低下した連中ではどうやら乗り越えてくる事は出来ないらしく、生き残った先生、生徒達は安堵感に包まれるのも自然だった。
だが――直ぐにまた地獄に変わった。
侵入を許した訳ではない。
何かの映画よろしくゾンビ達が進化しより狂暴になって襲い掛かってきた訳でもない。

『死』が連鎖しだしたのだ。
兆候は確かにあった。痛みを訴える者達が急増し始めた。危険は去った筈だったのに、一日が終わろうとした時には何人も物言わぬ身体になってしまった。
まだ繋がっているネットでも色々と言われていた。
あのゾンビとなってしまった人達の事を『保菌者』と呼ばれていて、その理由は噛まれると何かに感染して死ぬからだ。
映画と言う空想、想像の産物が全て現実へとやってきた。そう思った瞬間でもあった。死と隣り合わせの世界。一体誰がこんな事を望むだろうか。
死者の8割が大人だった。子供達を守ろうと最後まで戦い、最後は苦痛に苦しみながら息を引き取った。それをただ見ている事しか出来なかった。

そして今。視聴覚室にて、何かを整備している龍の姿があった。その傍にはいつも付きっ切りでいた筈の香里の姿は無かった。
「……よ……しッ」
軽くガッツポーズをする龍。
騒動のせいで、壊れてしまっていた無線機を　学校の備品を使ってどうにか修復する事が出来たのだ。

スイッチを入れると、雑音が聴こえてくるが問題なく繋ぐ事が出来た。
「聞こえるか？　こちらは龍。神城。聞こえたら返事してくれ。――どうぞ」
『漸く連絡を寄越しやがったな？　龍。小学校にいるんだろ？　そっちは大丈夫か？』
「……ぁぁ。今んとこはな。とりあえず、あの訳の分からん連中――保菌者、だったか。アレはお引き取り願った所だ。校内は安全だ」
『ったく、可愛げのねぇヤツだな……やっぱ。心配して損したぜ。……流石だ』
ぐっ……　と自然と無線機のマイクを握る手に力が籠る。
「……テツ先輩は？」
『今出払ってる所だ。……先輩も結構心配してる風だったぞ。表情はあんま変わってなかったが』
「……そりゃ、あの人がオレを此処に連れてきたんだし。でもまぁ、今は感謝してるよ。……今、それを伝えたかったんだが、そうか、……いないのか」
『……』
軽くため息をする龍。
それに何かを感じ取ったのか、神城も返事が遅れた。
「なぁ……神城。今のこっちの現状だけど全部伝える。……悪い。優先順位ってのがあるとは思うんだが。オレと皆の好で　こっちに人を寄越してくれないか？」

『ああ？　何言ってんだ龍。お前ひとりいりゃ　全部守るのだって楽勝だろ？　一体誰と訓練をしてきたと思ってんだ。あんな連中一捻りだろうが』

龍はそれを訊いて、今度は軽く笑った。確かに今の自分がいるのは、皆を……香里を守る事が出来たのは　この相手……神城のおかげだとも言える。今から言う言葉……それは　普段、そんな事口にはしないが、自然と出てきた。

「ありがとな……」

『……何言ってやがる』

「頼む。……何も訊かず、ただ『判った』と言ってくれ。それだけで十分だ。……その言葉だけで、十全に信じられる。だから後は……ッ。頼み、ました。神城……先輩」

初めて聞いたのは　神城だって同じだ。

消防署のメンバー全員が龍の口から訊いた事の無い言葉だった。

懇願する事、敬う様な話し方。全部殆ど全部ひとりでやってしまう様な男からの頼み。

そして、それを訊いたのは神城だけではなかった。

『消防士の役割。役目はなんだ!!』

一際デカい声が聞こえてきたかと思えば、続けざまに聴こえてくる。恐らく、神城の傍に何人もいたのだろう。話を、訊いていたのだろう。

『市民を助け、そして生還する事！』

『諦める事など、許す筈もない！　許される事でもない！　死ぬ事だって、許される筈がない！』

続いてガチャ！　と無線の奥で音が聞こえる。乱暴に無線機をひったくった様だ。

『それが真田　龍　と言う消防士の人生だ！　オレはそう教え込んだ筈だぞ!!　何を忘れている!!!　忘れるな！』

「……テツ、先輩」

そこには　いないと言っていた筈の男が戻ってきていた。

『……おい。聞いてんだろ？　まだくたばってねぇんだろ？　先輩方はこんなに弱腰になったお前にご立腹だ。……最後まで男を見せろよ。ぜってぇ死ぬんじゃねぇ。お前

なら出来る！　何せお前は、オレを初めて負かした男だろう？　……ぜってぇ死なねぇよ』

時間が止まった様に感じる龍。

何処か諦めている自分が確かにいた。次々と死んでいく人たち。そして、鈍く痛む傷口。鎮静剤を打ったがそれでも効果は無かった。身体を蝕んでいくのがよく判る。……死がみえだしてきているのも判る。だから、諦めてしまっていたんだ。

『おいコラ！　聞いてんのか!?』

『溜まりに溜まったツケ、まだ払ってもらってないんだぞ！』

『成人式で、酒たらふく飲ませてやるっつったよな？　破るなよ!?』

『返事しろよ！　超新星（スーパールーキー）!!』

賑やかになってきているのが判る。

そんな時だった。背に感触があったのは。

「……りゅう、先生」

それは小さい手。
小さくとも懸命に戦い、皆を守ろうと頑張ってきた者の手。
「諦めちゃ……嫌。せんせーは　何だって、出来るんだから……　いやっ」
その手は震えている事も判った。

守ろう――と誓った者が　まだここにいる。今自分がいなくなるわけにはいかない。

何故諦めてしまったのか判らない程に、脱力しきっていた龍の中に力が戻ってきた。
そして、今だ賑やかな無線機をぐっと握りしめ、タイミングを見計らってボタンを押し、力の限り叫んだ。

「皆して　うるせぇな！　やりゃあ良いんだろう！　やりゃあ！」

11話

――あれからどれくらい経っただろうか。

あのゾンビ。保菌者に噛まれた者達の末路。

目の前で顔見知りが、友達が、親しかった先生が、守ってくれた人が死んでいく。

こんな生き地獄で精神状態がまともにいられる筈がないのが普通だが、そこで特に身体を張り、皆を励まし続け安心させ続けたのは大人達以上に香里だった。

時には何も言わず寄り添い、時には力強く励ます。時には涙を我慢する程の悲しみを堪え……　その小さな身体で本当に頑張ってくれていた。先生達も『どちらが大人か判らないな』と微笑むまでには精神を安定させることが出来た様で、少なくともパニックによる人間同士の二次被害は起きない。それだけが　せめてもの救いだと言えるだろう。

そして今。龍は視聴覚室にあったＰＣの電源を入れ忙しなくキーボードをたたき続

けていた。最初はノートとペンだったのに、と言うツッコミはもう無しだ。
もう誰にも明かすつもりはないが　正直　死を覚悟していた龍は、遺書のつもりでノートを使っていたから。

でも、消防隊の皆に尻を叩かれ、香里には泣かれ　完全に目を覚ました。
諦める様な気持ちは一切持たない事を。

だから今できる事をする。この小学校の場所。その地理情報。周囲の建物。全ての情報を頭の中に入れつつ、最適なルートを導き出す。ネットの情報も同時に照らし合わせながら。
この場所にとどまり続けるのはまだ可能だ。だが、それでも備蓄には限界があるのも事実。消防隊の皆が無事である事に疑う余地はないが、此処に救助に来る事が出来るのは何時になるのか、正直皆目見当がつかないから出来うることはしなければならない。物資の補給。そして最悪突破された時の対処法から脱出ルートの確保。と徐々に形を成してはいくもののまだまだしなければならない事は残っている。

でも――そんな忙しい時なのに、龍の手は時折止まってしまう。

その右手には包帯が巻かれており、血も滲み出ていた。そう、そこは保菌者に噛まれた所。正確には自分自身のミスでの負傷。バカ話にもならない傷だ。そこを中心にまるで広がっていく様に痛みが全身を駆け巡る。そんな痛みを前にしても竜は表情には出さない。自分の不安が全体の不安へとつながっていくのを理解しているからだ。

だが、それでも　時折手が止まってしまう事だけは　どうしようも無かった。

「ちっ……　痛みは邪魔だ。すっこんでろ！　クソっ……、そういや消防に入った頃からデスクワークだけは苦手だったな」

……因みに痛みのせいで止まる……のではなく、単純にタイピングがどちらかと言えば苦手だからと言う理由だったりする。机の上でカタカタするのは性に合わないらしく、実地試験の方が得意だから。だから　禁断症状の様に　手が止まる。それに痛みが合わさって更にムカつく。

つまり、竜にとって痛みはどうって事ない。どれだけ痛かったとしても　自己暗示の様に　痛みを多少コントロールする事が出来るからだ。

「でもまぁ、残せるもんは残さないとな。……皆に怒られそうだ」

痛みはコントロールできる。でも、命の終わりまでコントロールできるか？　と聞かれれば頷けない。でも　最後までやるしかないのだ。

あの時の無線。もう繋がっていないが、はっきり言ってしまったから。『やれば良いんだろ！』と啖呵切ったのだから。そして、何より……。

「竜せんせー。珈琲入りましたー。ちょっと一服しましょうっ！」

笑顔を絶やさず、世話を焼いてくれる少女……香里がいるからだ。

この子の前であれば、自分は無敵にすらなれる。と本気で思ってしまっている自分がちょっぴり恥ずかしいとさえ思ってしまう。

でも、ただただそれに甘えるのは（精神的な）大人として失格だ。

「オレの前では無理しなくて良いぞ香里」

「っ……え、えー？　大丈夫ですよっ！　だって、せんせーがいてくれるんですから！」

大丈夫、と言っても竜は知っている。

香里が携帯電話を時折持っては辛そうな表情をしているのを。

「香里」

「は、はい？」
「よく頑張ったな。これはオレからのプレゼントだ」
「え、え……（ま、まさか……ちゅー……　き、キス、かなっ!?）」
香里はこの瞬間だけ、大変だった事。今も続いている事。悲しかった事などが　少々不謹慎ではあるものの全部忘れる事が出来た。
張り詰めた空気の中、頑張り続けたのだから、この位香里が欲しても誰も文句は言わないだろう。

でも――文句は言わないが、勘違いしてしまう、と言うのは香里自身の責任だ。

「これだ」
「……え？」
目をぎゅっ　と閉じて　『いつでもどーぞ！』と言わんばかりに、僅かに唇を突き出して待っていたのだが……来たのはノートパソコンの画面。
本当に一瞬。……一瞬だけ険しい乙女の表情になったのは言うまでもなかったが、直ぐに食い入る様に画面を見つめた。

訊いた事のある高校の名前……　そして　救出の文字。安全な移動手段……ｅｔｃ

目を向ける部分が山ほどあって追いつかなかった。

「ずっと心配してただろう？　兄の事。万全にとは言えないが助ける手段は整った。一番は　先生達が大型バスを補強してくれたおかげだな」

ここでの攻防戦の際、学校の壁を壊して侵入してきたのを除いて大型車の侵入は二度程あった。　１つは保菌者に襲われたのだろう。そのままコントロールを失い、学校の直ぐ横にある住宅マンションに衝突し炎上、ガソリンに引火して大爆発を引き起こした。

そして、もう１つは幸運にも無傷だった。

大型バスで逃げてきた運転手が　学校付近にまで逃げてきた所でバスを乗り捨てバリケードを超えて逃げ込む事が出来たから。燃料もほぼ満タンである事も幸運の１つだった。

後は簡単。龍が難無く群がってきた化け物達を一蹴して、安全地帯を少し広げるだけでバスの回収も済んだ。

運転手が目を白黒させながら『アンタ、何者だ!?』と驚いていたのは無理もない事だ

ろう。
『私達のせんせーですっ！』
と香里は胸を張り。
龍はそれに乗る様に　にっと笑顔を香里に見せると。
『オレに勝てるヤツはこの辺にはいない。もしこの辺にいる。来てるのなら　もうオレ達は助かってるよ』
それで疑問が解消される筈がなく、運転手は暫くずっと目を白黒させていた。
龍の話から　それが消防隊の仲間の話、と連想させ、理解するなんてできる訳ないから。

余談はここまでにしよう。つまり　移動手段はもう手に入れてあるという事だ。
でも全員を連れていくには当然往復しなければならない。保菌者たちを間違いなく引き付けてしまう為、安全なルートを何通りも検討しなければならない。
そして何よりも――助けるのは　自分達だけで良いとは考えていない事だ。
「香里の兄のいる高校はここから近い。だから　さっさと連れてくるよ。家族は、一緒が一番だからな」

龍は香里の頭を二度、三度と撫でた。
そして　無言の涙。張り詰めていたものが一気に流れる様に出てくる涙。
香里は兄の事も心配だった。大好きな兄だから。そして龍の事も同じだった。保菌者に噛まれた人が死んでいくのを見てきて、本当に気が気じゃなかった。いつ、この笑顔が見れなくなるのか、と仮眠をとる事だってしたくなかった。目を離している間に……と悪く考えてしまうからだ。
でも、今はどうだろう。
兄を助けられるかもしれない。
そして　龍は笑顔だ。いつもと変わらない笑顔だ。

「大丈夫だ。……オレが全部守ってやる。約束、しただろう?」
泣き続ける香里を抱きしめ、背を摩る。小さな身体で、その小さな背に大きなものをずっと乗せ続けてきたのだ、と改めて龍は感じていた。
「あ、ありがとう……ございい、ます。りゅう、せんせーーっっ!!」
抱きしめ返す香里。格好悪い、と思う気持ちも少なからずあるが、それでもわんわん泣き続ける。どさくさに紛れてお礼のキスを……とも考えられずに泣き続ける。

暫くして落ち着きを取り戻した所で　龍は笑顔で言った。
「香里が頑張り続けたからプレゼントだ。……でも、ちゃんと我慢してもらう所はしてもらうからな？」
「え……？　我慢??」
「ああ。……香里」
笑顔だった龍の表情が真剣なものへと変わった。
そして、香里が自分が考えていたことを龍にあっさり見破られてしまった事に次の言葉で気付く事になった。

「一緒に付いていきたい。は禁止だ。ここで待っててくれ」